

第41集

日高市埋蔵文化財調査報告書 第41集

宿東
33次調査

宿 東

—33次調査—

日高市遺跡調査会

2020

埼玉県日高市遺跡調査会

あ い さ つ

日高市は埼玉県南西部に位置し、埼玉県を代表する清流高麗川が流れ、緑も多く自然に恵まれた住環境にあります。文化財につきましても、先人が長い年月をかけて築きあげた歴史や文化が数多くあります。とくに「続日本紀」に記述されている霊亀二年、西暦716年の高麗郡設置は当市の大きな出来事であり、平成28年には建郡1300年を迎えました。

近年、土地区画整理事業に伴う市街化の整備や首都圏中央連絡自動車道、国道407号バイパスの一部開通など急激に都市化が進み、先人の生活や文化を伝える埋蔵文化財の保護、保存が急務となっております。当市では開発に伴って緊急発掘調査を行い、記録保存の処置を講じております。

今回刊行する報告書は、平成28年度に調査しました当市最大の縄文集落である宿東遺跡の成果をまとめたものです。

本書が郷土資料、学術資料として広く活用され、郷土愛そして文化財保護の向上に役立てば幸いです。

発掘調査そして報告書の刊行にあたり、ご協力いただきました比留間政太郎様をはじめ、文化庁、埼玉県教育委員会、多くの市民の皆さま、発掘調査に従事いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

令和2年2月

日高市遺跡調査会
会長 新井孝重

例 言

- 1 本書は埼玉県日高市大字高萩に所在する宿東遺跡（135遺跡）33次調査の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、駐車場造成工事に伴い比留間政太郎氏から委託を受けて日高市遺跡調査会が実施した。
- 3 調査期間は、平成28年7月1日から平成28年10月6日である。
- 4 発掘調査の届出に対する埼玉県教育委員会の指示通知は平成28年7月15日付教生文発第3-19号である。
- 5 発掘調査、資料整理及び調査報告書作成は松本尚也が担当した。
- 6 挿図図版の縮尺は、それぞれのキャプションに明記した。挿図中の遺物番号と写真図版番号は一致する。
- 7 拓本、トレース、遺物実測は新井敏子、長部孝子、勝山敏江、倉本信代、田中ひさ子、渡辺敬子が行い、図版作成、遺物写真撮影は松本尚也が行った。
- 8 本書の執筆、編集は松本尚也が行った。
- 9 石質の鑑定は、埼玉県立川越南高等学校教諭田口聡史氏にお願いした。

10 調査組織

調査主体者	日高市遺跡調査会		
会長	新井孝重（日高市文化財保護審議委員長）		
副会長	野村泰平（日高市教育委員会教育部長）	平成28年度	
	吉野靖彦（日高市教育委員会教育部長）		
理事	高麗文康（日高市文化財保護審議委員）		
	野口隆行（日高市文化財保護審議委員）	平成28年度	
	加藤則子（日高市文化財保護審議委員）		
監事	新井 聡（日高市文化財保護審議委員）	平成28年度	
	野川康雄（日高市文化財保護審議委員）		
	新井敏子（日高市文化財保護審議委員）		
事務局長	中平 薫（日高市教育委員会生涯学習課副参事）	平成28年度	
	駒井 実（日高市教育委員会生涯学習課長）		
事務局員	松本尚也（日高市教育委員会生涯学習課文化財担当主査）	平成28年度	
	〃（日高市教育委員会生涯学習課文化財担当主幹）		
	早川修司（日高市教育委員会生涯学習課文化財担当主査）		
	大熊雅弘（日高市教育委員会生涯学習課文化財担当）		
調査担当者	中平 薫（日高市教育委員会生涯学習課副参事）	平成28年度	
	松本尚也（日高市教育委員会生涯学習課文化財担当主幹）		
	早川修司（日高市教育委員会生涯学習課文化財担当主査）		
	大熊雅弘（日高市教育委員会生涯学習課文化財担当）		

11 発掘調査及び資料整理作業員

調査作業員	新井敏子	加治由行	勝山敏江	倉本信代	小嶋信子	田中ひさ子	土屋八重子
	土肥敏子	本間博子	森 稔子	渡辺敬子			
資料整理	新井敏子	長部孝子	勝山敏江	倉本信代	小嶋信子	土屋八重子	田中ひさ子
	本間博子	森 稔子	渡辺敬子				

目 次

あいさつ

例 言

第1章 遺跡の立地と環境	1
1：立地と環境	1
第2章 調査の経過	4
1：立地と調査経過	4
第3章 遺構と遺物	6
1：遺構外出土遺物	6
2：48号住居址	7
3：49号住居址	12
4：50号住居址	29
5：1号集石土壙	42
第4章 まとめ	43
1：遺構の時期について	43
2：遺構の分布について	46

插图目次

1	遺跡位置図	2
2	宿東遺跡周辺地形図	4
3	宿東遺跡33次調査区全測図	5
4	遺構外出土遺物	6
5	48号住居址	7
6	48号住居址炉	8
7	48号住居址出土遺物(1)	9
8	48号住居址出土遺物(2)	10
9	49号住居址	13
10	49号住居址遺物出土状況図	14
11	49号住居址炉	15
12	49号住居址出土遺物(1)	16
13	49号住居址出土遺物(2)	17
14	49号住居址出土遺物(3)	18
15	49号住居址出土遺物(4)	19
16	49号住居址出土遺物(5)	21
17	49号住居址出土遺物(6)	22
18	49号住居址出土遺物(7)	24
19	49号住居址出土遺物(8)	25
20	49号住居址出土遺物(9)	27
21	49号住居址出土遺物(10)	28
22	50号住居址	30
23	50号住居址遺物出土状況図	31
24	50号住居址炉	32
25	50号住居址出土遺物(1)	33
26	50号住居址出土遺物(2)	34
27	50号住居址出土遺物(3)	35
28	50号住居址出土遺物(4)	36
29	50号住居址出土遺物(5)	38
30	50号住居址出土遺物(6)	39
31	50号住居址出土遺物(7)	41
32	1号集石土壙、出土遺物	42
33	土器変遷図	44
34	宿東遺跡遺構分布図	47

図版目次

- 図版1 33次調査区遠景(48、49号住居址)
33次調査区遠景
(50号住居址、1号集石土壙)
- 図版2 48号住居址
48号住居址炉
48号住居址炉完掘
- 図版3 49号住居址遺物出土状況(1)
49号住居址遺物出土状況(2)
49号住居址遺物出土状況(3)
- 図版4 49号住居址遺物出土状況(4)
49号住居址遺物出土状況(5)
49号住居址(1)
- 図版5 49号住居址(2)
49号住居址炉
49号住居址炉完掘
- 図版6 50号住居址遺物出土状況(1)
50号住居址遺物出土状況(2)
50号住居址遺物出土状況(3)
- 図版7 50号住居址遺物出土状況(4)
50号住居址遺物出土状況(5)
50号住居址遺物出土状況(6)
- 図版8 50号住居址遺物出土状況(7)
50号住居址(1)
50号住居址(2)
- 図版9 50号住居址1号炉
50号住居址1、2号炉完掘
50号住居址3号炉
- 図版10 1号集石土壙
1号集石土壙半截状況
1号集石土壙完掘
- 図版11 遺構外出土遺物
48号住居址出土遺物(1)
- 図版12 48号住居址出土遺物(2)
- 図版13 49号住居址出土遺物(1)
- 図版14 49号住居址出土遺物(2)
- 図版15 49号住居址出土遺物(3)
- 図版16 49号住居址出土遺物(4)
- 図版17 49号住居址出土遺物(5)
- 図版18 49号住居址出土遺物(6)
- 図版19 49号住居址出土遺物(7)
- 図版20 49号住居址出土遺物(8)
- 図版21 50号住居址出土遺物(1)
- 図版22 50号住居址出土遺物(2)
- 図版23 50号住居址出土遺物(3)
- 図版24 50号住居址出土遺物(4)
- 図版25 50号住居址出土遺物(5)
- 図版26 50号住居址出土遺物(6)
1号集石土壙出土遺物

第1章 遺跡の立地と環境

1：立地と環境

日高市は埼玉県南西部の山地と丘陵地の境界に位置し、首都圏50kmにあたる。市の西部には外秩父山地の東縁が広がり、山地の縁辺部には八王子構造線が南北に走っている。外秩父山地からは北に毛呂山丘陵、南に高麗丘陵が東へ舌状に張り出しており、市の南北はこの2つの丘陵により画されている。奥武蔵正丸峠付近の山々を源とする高麗川は市の西部から北辺を小さな蛇行を繰り返しながら東流し、高麗丘陵との間に扇状の沖積地を形成している。高麗川から東方の右岸を坂戸台地と呼び、市の平坦部はこの坂戸台地に位置している。坂戸台地は市西部の高麗本郷付近を扇頂とする古い扇状地形で、高麗丘陵を源とする小畔川をはじめとした多くの小河川により小支谷が形成されている。

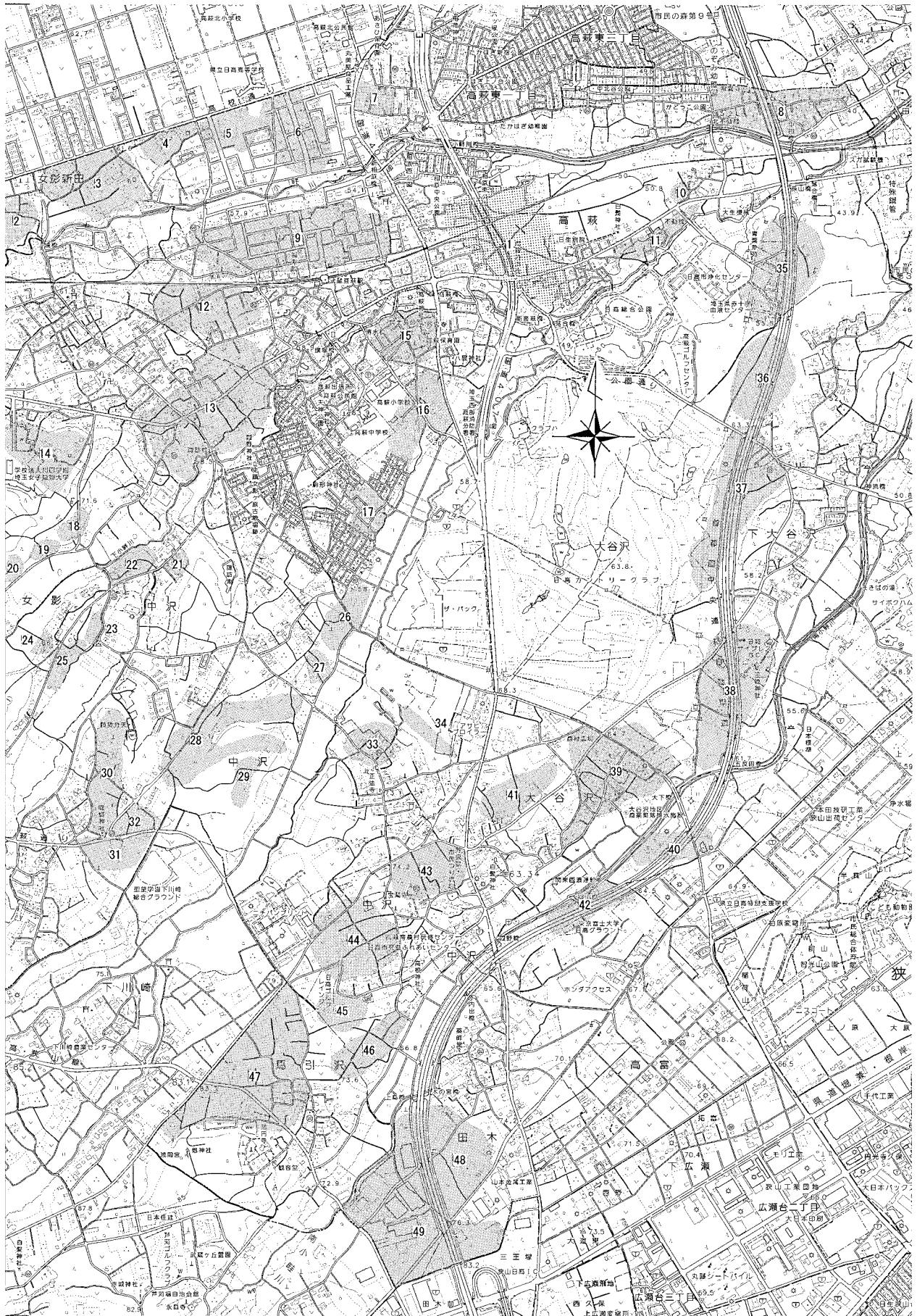
市西部の高麗地区は、高麗川が大きく蛇行している巾着田をはじめ、山地は奥武蔵自然公園に指定されており多くの自然が残っている。市中央部の高麗川地区は高麗川駅西口土地区画整理事業が終了し、市東部の高萩地区でも寺脇土地区画整理事業の終了、武蔵高萩駅北土地区画整理事業や首都圏中央連絡自動車道の開通により都市化が進み景観が大きく様変わりしている。

当市の遺跡立地を考えると、高麗川や高麗丘陵を源とする幾筋もの小畔川、飯能市を源とする南小畔川流域に沿って遺跡が連なっている。各河川流域の遺跡の密度は濃く、旧石器時代の遺跡も確認され、縄文時代になると遺跡数が増大する。遺跡は概ね河川近くの台地に立地し、水の確保が容易な場所に築かれている。市内には沖積地の発達した地域が少ないためか弥生時代の遺跡は確認されていない。古墳時代の遺跡も僅かに2ヶ所確認されているだけで、まったくの空白期といえる。奈良時代になると、霊亀二年（西暦716年）に日高、飯能両市にまたがる地域を中心に高麗郡が建郡され、それ以降集落は爆発的に増え続け平安時代に興隆期を迎える。これらのことが当市の歴史の大きな特徴である。

宿東遺跡（1）は高麗丘陵を源とする小畔川、下小畔川や第二小畔川の合流地点に広がる市内最大の縄文時代の集落遺跡で、これまでに勝坂期から後期初頭までの住居址200軒以上を検出している。遺跡の東500mの下小畔川左岸には加曾利EⅠからEⅢ期の住居址7軒などを検出した西不動遺跡（10）が、また遺跡の西300mの小畔川右岸には、土地区画整理事業に伴う発掘調査で勝坂期から加曾利E期の住居址33軒を検出した堀ノ内遺跡（9）が位置し、下小畔川を挟んで宿東遺跡の対岸に位置する寺脇遺跡（15）でも加曾利EⅢ期から後期初頭の柄鏡形住居址を含む住居址7軒などを検出するなど、継続期間の長い宿東遺跡の周囲に比較的継続期間の限られた集落が点在している。

小畦川、下小畦川、第二小畔川及び市の東部を流れる南小畔川流域にはこの他にも縄文時代の遺跡が点在している。下小畔川、第二小畔川流域には、谷津前遺跡（16）、北中沢遺跡（17）、向原遺跡（28）、西佛遺跡（30）、森ノ腰遺跡（31、32）が所在している。下小畔川から分流する第二小畔川流域に位置する谷津前遺跡では中期末葉から後期初頭の柄鏡形住居址2軒を、北中沢遺跡では加曾利EⅠからEⅢ前半期の住居址14軒などを検出している。西佛遺跡、森ノ腰遺跡は下小畔川右岸に位置する。遺構の分布から両遺跡は同一集落と考えられ、西佛遺跡では柄鏡形住居址を含む勝坂期から後期初頭の住居址15軒、森ノ腰遺跡では加曾利EⅢ前半期の住居址4軒を調査しているなど、継続期間の長い集落である。

南小畔川流域では二反田遺跡（38）で加曾利EⅠからEⅡ期の住居址13軒、二反田遺跡から沢を挟んだ南西に位置する宮久保遺跡（39）で加曾利E期の住居址4軒を検出した。さらに上流域では、勝坂期から



第1図 遺跡位置図 (1/20,000)

加曾利EⅢ期の住居址80軒以上を検出した同一集落の上原遺跡(48)、向原遺跡(49)が所在している。

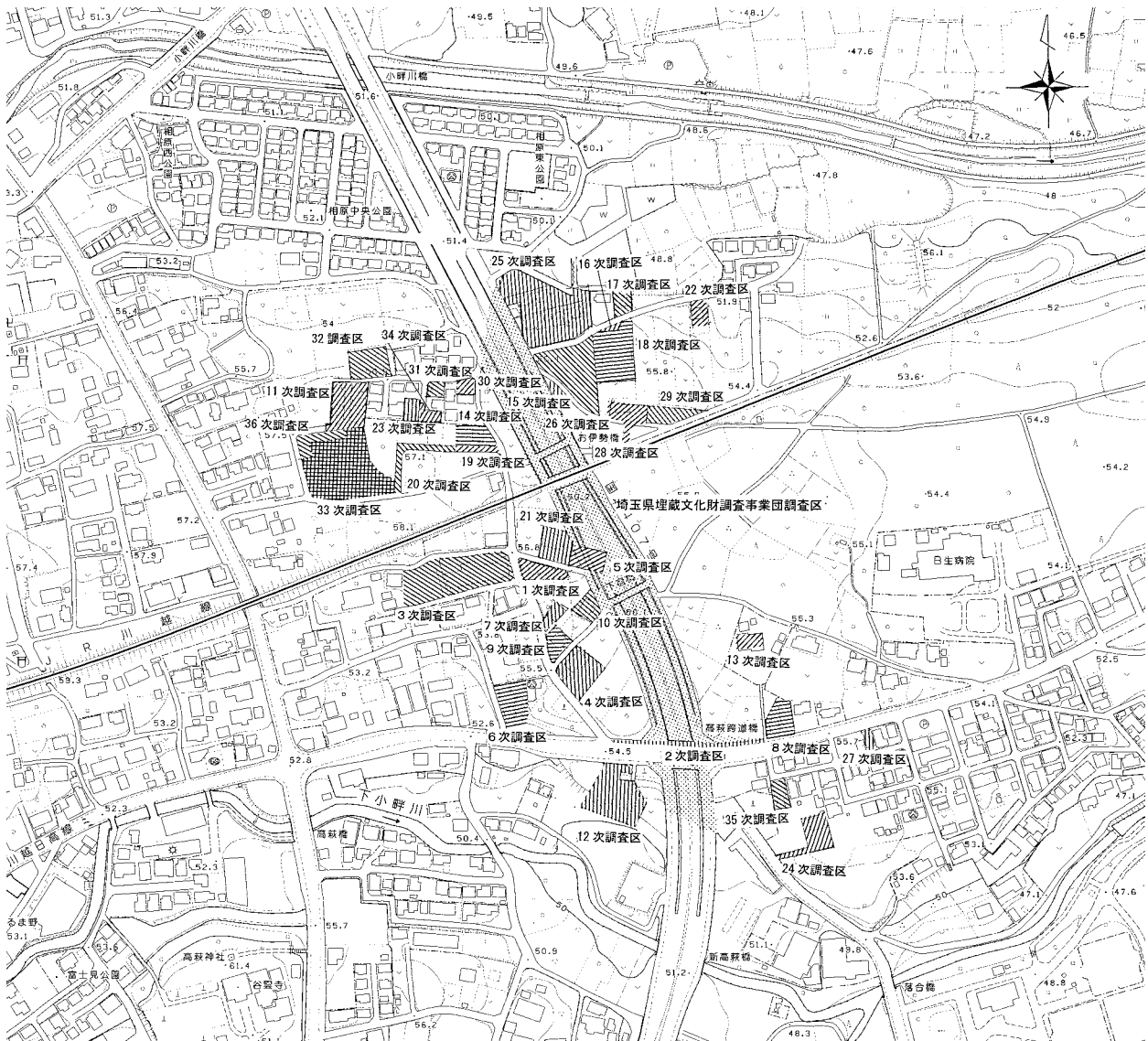
奈良・平安時代は、小畔川左岸に大黒ヶ谷戸遺跡(2)、道光林遺跡(3)、中王神遺跡(4)、王神遺跡(5)、拾石遺跡(6)、新宿遺跡(7)が連綿と所在している。大黒ヶ谷戸遺跡では8世紀後半から9世紀中葉の住居址が2軒、道光林遺跡では8世紀前半の住居址3軒が調査されている。中王神遺跡でも住居址を2軒検出している。王神遺跡では8世紀中葉から9世紀前半の住居址14軒、井戸址3基、道路遺構1条、水路遺構1条、東西5間×南北4間で中柱を持つ建物跡1棟の調査を行った。住居址覆土からは鳥形硯の蓋の一部が出土した。関東地方での出土例はなく、近隣では長野県塩尻市菖蒲沢窯跡から出土している。拾石遺跡は8世紀中葉から9世紀後半の住居址46軒、井戸址14基、道路遺構1条、水路遺構2条、掘立柱建物跡6棟を調査し、耳皿、石製巡方、石製丸靱、漆紙などの特殊な遺物や、「厨」、「家長」、「南家」、「貞」、「坏」、「田」、「万」などの墨書土器も出土している。道路遺構、水路遺構は王神遺跡と同一の遺構である。新宿遺跡では8世紀中葉から9世紀後半の住居址11軒を検出している。「山本」と書かれた墨書土器は、貞観十四年(872)の『貞観寺田地目録帳』(仁和寺文書)に出てくる武蔵国高麗郡山本荘との関連資料として注目される。小畔川右岸には堀ノ内遺跡(9)が所在している。堀ノ内遺跡では、これまでに8世紀中葉から9世紀中葉の住居址167軒、井戸址99基、掘立柱建物跡54棟、溝60条などが調査されている。住居址には小鍛冶遺構を有するものもあった。これらの遺構が台地縁辺部から遺跡南側の下小畔川に向かう緩斜面にかけて、いくつかのまとまりを持ちながら所在している。住居址軒数からも市内最大の奈良・平安時代の遺跡である。出土遺物も耳皿、銅製巡方、石製丸靱、漆紙、皇朝十二銭の「隆平永宝」や紡錘車、鎌、斧などの鉄製品のほかに、「仲」などが書かれた墨書土器など多くの遺物が出土している。若宮遺跡(13)は下小畔川左岸に位置している。遺跡の中を伝承鎌倉街道が南北に貫き、8世紀前半に建立されたとされる女影廃寺を含んでいる。この他に下小畔川左岸には小河原遺跡(14)、上敷遺跡(18、19)、姥ヶ原遺跡(20)が、右岸には金子ヶ谷戸遺跡(21)、上ノ条遺跡(23、24、25)が所在する。

市の東部には飯能市の高麗丘陵南麓を源とする南小畔川が流れ、二反田遺跡(38)、宮久保遺跡(39)、下向山遺跡(40)が所在している。下向山遺跡では9世紀の住居址3軒を調査している。下向山遺跡の対岸に所在する宮久保遺跡では、8世紀後半から9世紀の住居址10軒や掘立柱建物跡7棟が検出されている。二反田遺跡では8世紀前半の土師器坏を伴う住居址を検出している。上猿ヶ谷戸遺跡(8)は川越市境の小畔川左岸に位置し、これまでに奈良・平安時代の住居址4軒を検出した。また首都圏中央連絡自動車道の建設に伴う公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査で7世紀中葉から8世紀後半の住居址56軒、掘立柱建物跡40棟などを検出している。

遺跡一覧

1 宿東遺跡(縄文中・後期) 2大黒ヶ谷戸遺跡(奈良・平安) 3道光林遺跡(奈良・平安) 4中王神遺跡(奈良・平安) 5王神遺跡(奈良・平安) 6拾石遺跡(縄文早期、奈良・平安) 7新宿遺跡(奈良・平安) 8上猿ヶ谷戸遺跡(古墳、奈良・平安) 9堀ノ内遺跡(縄文中期、奈良・平安、中世) 10西不動遺跡(縄文中期) 11宮ノ後遺跡(縄文中期) 12古道遺跡(奈良・平安) 13若宮遺跡(奈良・平安) 14小河原遺跡(奈良・平安) 15寺脇遺跡(縄文中・後期) 16谷津前遺跡(縄文中・後期、平安) 17北中沢遺跡(縄文中期) 18、19上鋪遺跡(奈良・平安) 20姥ヶ原遺跡(平安) 21金子ヶ谷戸遺跡(縄文、平安) 22昔田遺跡(縄文) 23、24、25上ノ条遺跡(縄文、平安、中世) 26東方遺跡(縄文、平安) 27関場遺跡(縄文) 28向原遺跡(縄文中・後期、平安) 29柳久保遺跡(平安) 30西佛遺跡(縄文中期) 31、32森ノ腰遺跡(縄文中期) 33宿方遺跡(縄文中期、平安) 34向谷遺跡(平安) 35長山甲遺跡(縄文中期) 36西ノ久保遺跡(縄文後期) 37谷津遺跡(奈良・平安) 38二反田遺跡(縄文中期、奈良・平安) 39宮久保遺跡(縄文中期、奈良・平安) 40下向山遺跡(奈良・平安) 41新屋敷遺跡(縄文早・中期、平安) 42向山遺跡(縄文早・中期) 43下宿遺跡(縄文早・中・後期、平安) 44西原遺跡(平安、中世) 45上沢遺跡(平安、中世) 46上沢台遺跡(平安) 47北ノ原遺跡(奈良・平安) 48上原遺跡(縄文中期) 49向原遺跡(縄文中期)

第2章 調査の経過



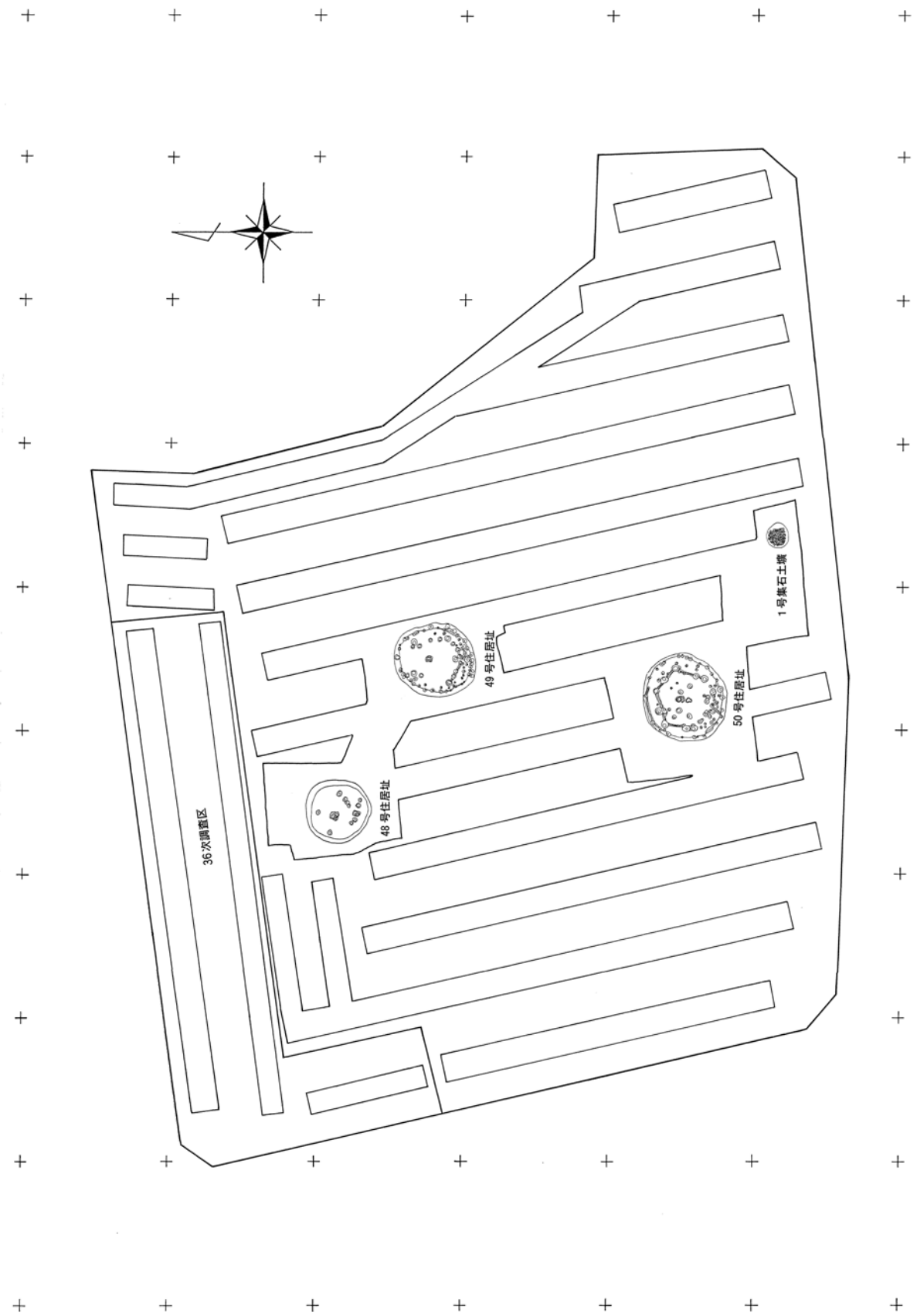
第2図 宿東遺跡周辺地形図 (1/5,000)

1：立地と調査経過

宿東遺跡は小畔川と下小畔川に挟まれた標高55mの台地上に位置する。本遺跡はこれまで日高市で32回の調査を実施し、縄文時代中期中葉から後期初頭の住居址51軒を検出した。また平成6年に国道407号バイパスの建設に伴う公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団による調査で、縄文時代中期後半から後期初頭の住居址160軒、掘立柱建物跡5棟、埋甕8基、土壙239基などを検出している。

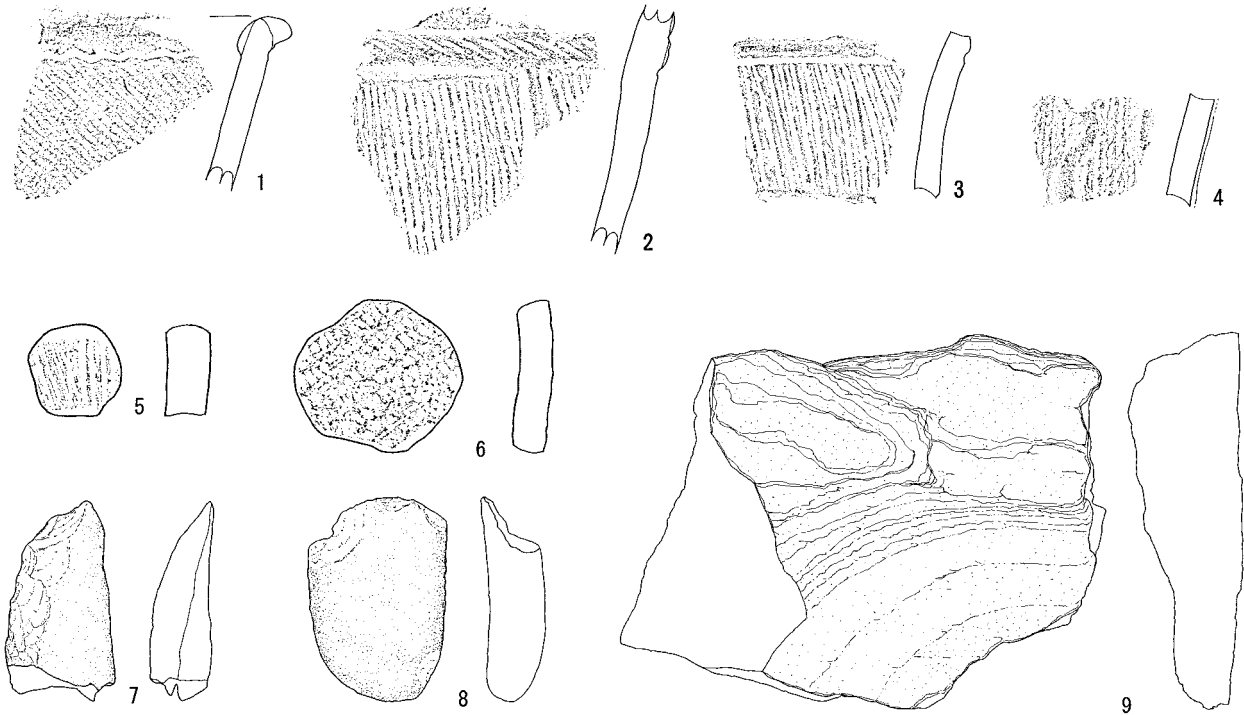
今回調査を実施した地点は雑種地で、所在は埼玉県日高市大字高萩字中宿50番地1、2である。調査面積は2,590.78㎡である。調査は平成28年7月1日から平成28年10月6日に実施した。調査区南北に幅2mトレンチを13本、幅1.5mトレンチを7本設定し、重機を用いて耕作土を除去し、遺構確認面である暗黄褐色ローム層上面まで25～60cm掘り下げた。調査区中央から南側で縄文時代中期中葉の竪穴住居址3軒、集石土壙1基を検出した。

事業者と協議の結果、樹木の抜根により遺構が破壊されるため、すべての遺構の発掘調査を実施した。



第3図 宿東遺跡33次調査区全測図 (1/400)

第3章 遺構と遺物



第4図 遺構外出土遺物 (1/3) 但し、5、6は (1/2)

1：遺構外出土遺物

縄文時代中期中葉土器 (第4図1～3・図版11-1～3)

1の地文は縄文で、口縁部は粘土紐により肥厚している。口縁直下に波状沈線が横走する。2の地文は撚糸文で、刻み目を持つ隆帯が横走する。隆帯脇の調整は沈線である。隆帯から2条一對の沈線が垂下している。3は胴部破片で、上端に隆帯が横走し、沈線間は半截竹管文による集合沈線が施される。

縄文時代中期後半土器 (第4図4)

4は地文に撚糸文を施す胴部で、1条の隆帯及び波状隆帯が垂下している。

土製品

土製円盤 (第4図5、6・図版11-5、6)

5、6は一部に周辺部磨調整がみられる。5は地文に条線が施される。最大径2.6cm、重さ8.4gをはかる。6は地文に縄文が施される。最大径4.4cm、重さ18.8gをはかる。

石器

打製石斧 (第4図7・図版11-7)

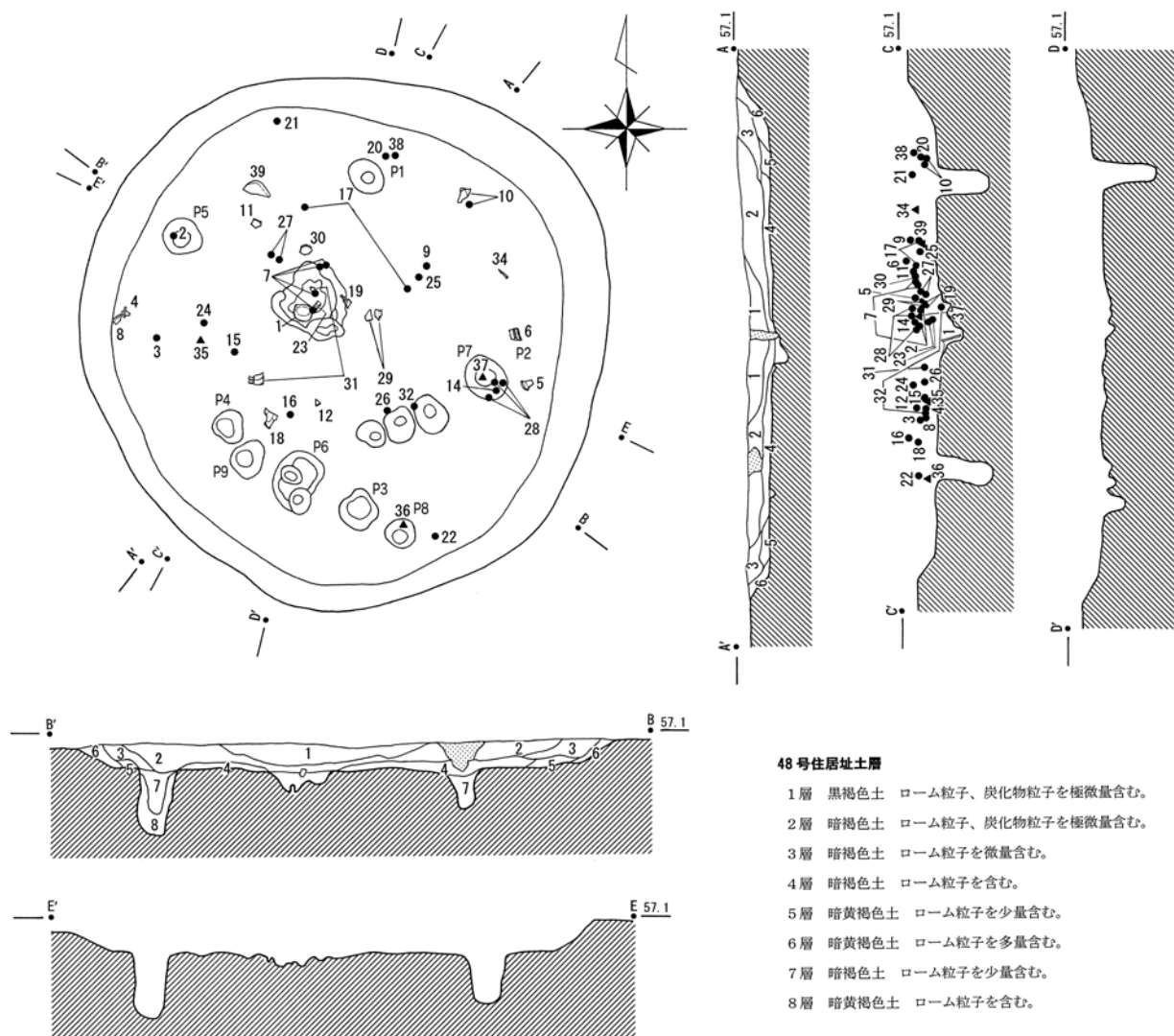
7は撥形を呈する。刃部を欠損する。自然面を残す。左側縁に調整剥離を施し、右側縁は裏面に調整剥離を施している。石質はホルンフェルスである。

敲石 (第4図8・図版11-8)

8は基部を欠損する。左側縁に敲打痕、右側縁、先端部に弱い磨滅痕が認められる。石質は砂岩である。

石皿 (第4図9・図版11-9)

9は大きく欠損するが、凹面に擦痕が認められる。石質は緑色片岩である。



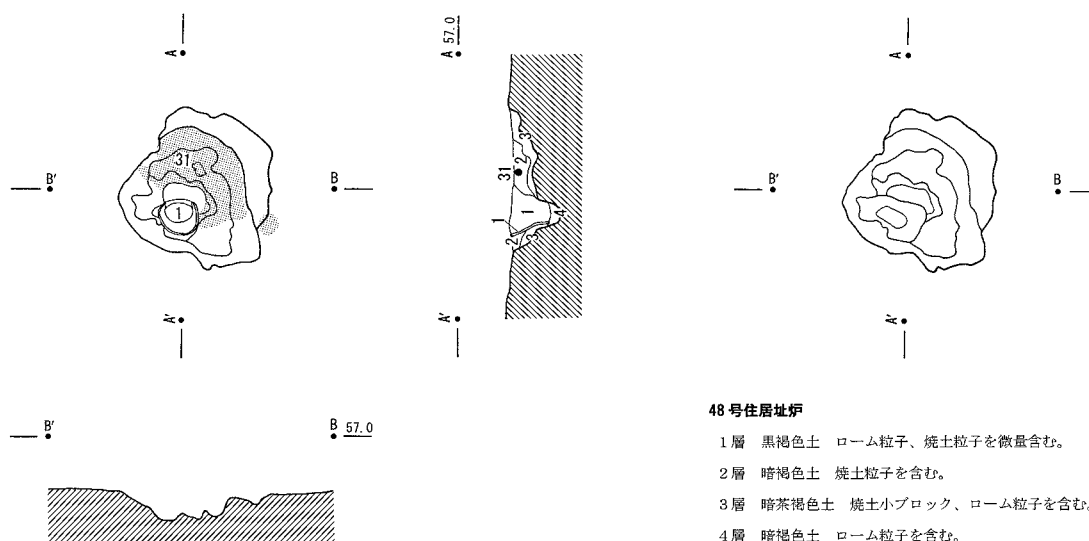
第5図 48号住居址 (1/60)

2：48号住居址

48号住居址は調査区の北側で検出した。北側で攪乱を受けていたが遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、南北4.4m、東西4.3mをはかる。主軸方位はN-28°-Eを示す。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。壁高は30cmをはかる。床面は平坦で締まっていたが、硬化は認められなかった。

柱穴は主柱穴を5本、支柱穴を4本検出した。P1からP5が主柱穴で径25~33cm、深さ31~52cmをはかる。主柱穴に隣接してP7からP9の支柱穴を検出した。P1に対応する支柱穴は攪乱内の可能性が高いと考えられる。径25.2~33.5cm、深さ42~52cmをはかる。南側のP6は長軸48cm、短軸32cm、深さ6.2cmの楕円形の浅い掘り込みである。

炉は埋甕炉で住居址中央やや北寄り検出した。規模は長軸63cm、短軸60cmの円形を呈し、深さ14cmをはかる。火床部周辺のロームは被熱により赤色硬化していた。



48号住居址 炉

- 1層 黒褐色土 ローム粒子、焼土粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 焼土粒子を含む。
- 3層 暗茶褐色土 焼土小ブロック、ローム粒子を含む。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子を含む。

第6図 48号住居址 炉 (1/30)

出土遺物

1は炉体土器である。

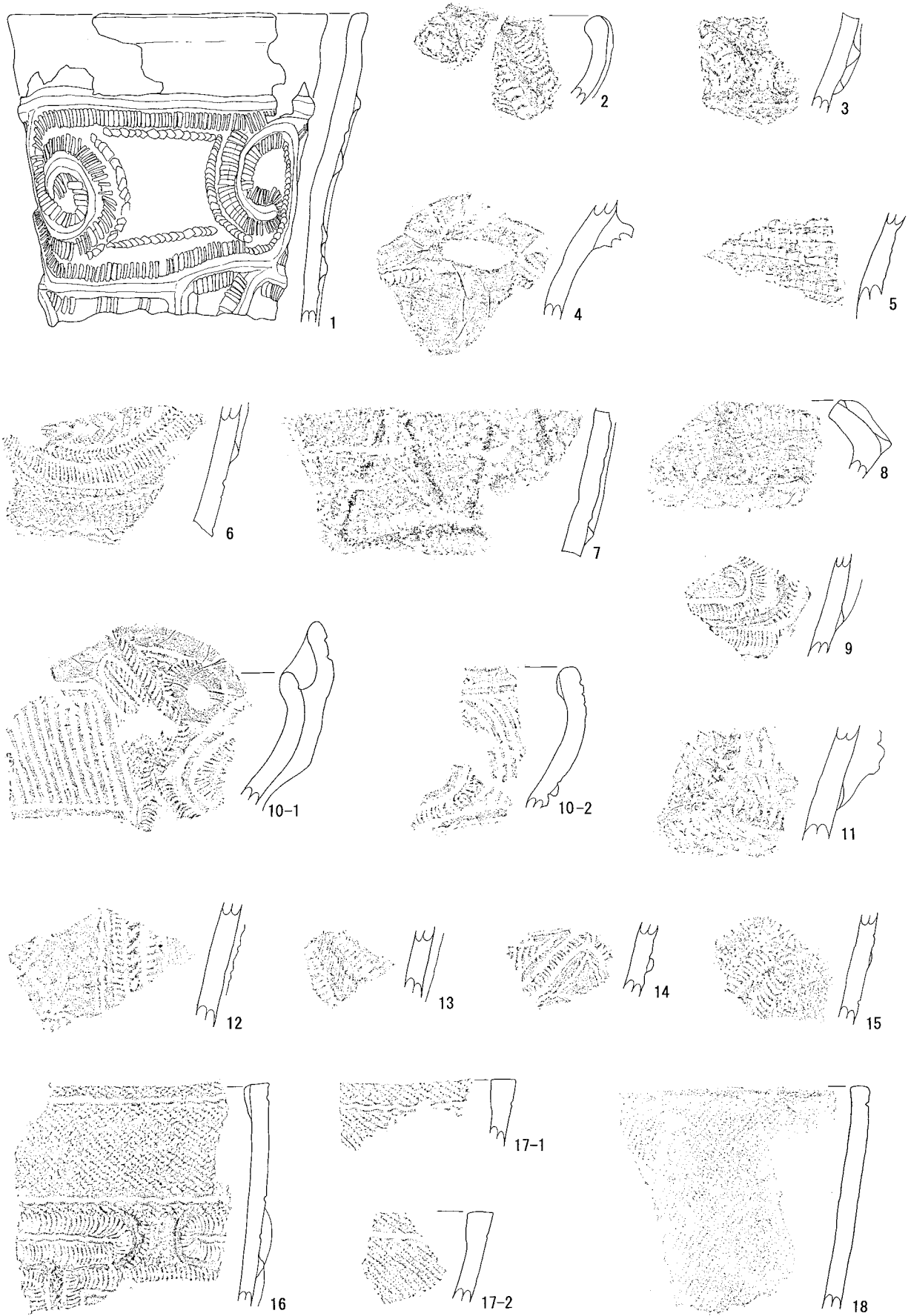
縄文時代中期中葉土器（第7図1～18・第8図19～31・図版11-1、3、6、7・図版12-10、13、15、16、18、32）

1～8は角押文を施す土器である。1は口縁部から胴部で、やや外傾しながら立ち上がる円筒形の土器である。炉体土器として検出した段階から胴部以下及び全周の1/3が欠損していた。口縁に無文部を有する。胴部は横走る隆帯により文様帯を区画し、それぞれの隆帯から渦巻文が展開している。隆帯に沿って連続爪形文及び三角押文を施している。推定口径19.2cmである。2は口縁部で、1条の隆帯が斜位に垂下している。隆帯に沿って連続爪形文が施されている。3、4は口縁部付近の破片である。3は胎土に砂粒を多く含んでいる。隆帯による三角形区画文が施されていると思われ、隆帯に沿って角押文と波状沈線が施されている。4は1条の隆帯が横走り、隆帯下部に押引文を施している。

5～7は胴部である。5は4条の角押文が横走る。6は地文に縄文を施し、連続爪形文を施した1条の隆帯が弧状に区画していると思われる。隆帯に沿って連続爪形文及び三角押文、さらに波状沈線が施されている。区画内は三角押文を綾杉状に施文している。7は1条の隆帯で三角形区画を作成している。隆帯に沿って押引文を施している。8は鉢形土器の口縁部で、隆帯による楕円区画文を持つ。隆帯に沿って連続爪形文を施し、区画内には波状沈線が横走る。

9～15は連続爪形文を施す土器である。9は胴部で隆帯による楕円区画文と思われる。隆帯に沿って連続爪形文及び1条の沈線が施される。隆帯は楕円区画の弧状部側縁にのみ刻み目が施されている。

10は口縁部で山形の突起を有する。刻み目を持つ隆帯により文様区画し、区画隆帯に沿って半截竹管文を施している。区画内は半截竹管による集合沈線及び連続爪形文と半截竹管先端による刺突文を施文している。突起は連続爪形文を施した隆帯を波状に垂下させ文様区画し、区画内は側面に連続爪形文を持つ隆帯による円文のほか、連続爪形文と半截竹管による刺突文が施されている。11は刻み目を持つ隆帯に沿って連続爪形文を粗く施す。12は刻み目を持つ隆帯に沿って連続爪形文及び波状沈線を施している。



第7图 48号住居址出土遗物 (1) (1/3)



第8図 48号住居址出土遺物 (2) (1/3) 但し、33は (1/2)

13は幅広の隆帯に沿って連続爪形文を施し、隆帯上には細沈線が垂下している。14は刻み目を持つ隆帯が山形に施された区画文と思われ、隆帯脇の調整は沈線である。区画内は波状沈線、弧状の集合沈線が施されている。

15～24は地文に縄文を施す口縁部から胴部の破片である。15は斜位に垂下する隆帯に沿って連続爪形文及び波状沈線を施している。16～20はやや外傾する円筒形を呈し、16～18は口縁部に1条の波状沈線が横走する。16は胴部に隆帯による楕円区画文も施すが、区画文の上側は隆帯を施していない。区画文から刻み目を持つ隆帯が垂下している。隆帯に沿って連続爪形文及び波状沈線を施す。19の口縁部は幅の狭い無文で、1条の隆帯が斜位に垂下する。隆帯上にも縄文が施されている。

21～23は口縁部が内彎する器形である。22は口縁部に沿って連鎖状隆帯が横走する。23は口縁部突起を持つと思わる。口縁部に刺突文が穿たれている。

24は隆帯により肥厚した口縁部突起である。25は口縁部突起の破片で、隆帯を円文や波状に垂下させた文様構成で、円窓を持つ。26は口縁部付近の破片と思われ、半截竹管を横走させ、刻み目を持つ扁平な波状隆帯が横走する。

27～30は無文の胴部から底部である。27は1条の波状沈線が横走する。29は底径9.6cm、30は底径9.2cmをはかる。

31、32は胎土に金雲母を含む土器である。31は隆帯により肥厚した口縁部で、隆帯に沿って2条の沈線が横走する。32は胴部で、山形の隆帯による区画文としている。区画内は隆帯に沿って、2条一対の沈線が施され、沈線の一部は押引文となっている。隆帯は貼り付けたままの無調整である。

土製品

土製円盤（第8図33・図版12-33）

33は周辺部磨調整がみられる。最大径1.9cm、重さ4.7gをはかる。

石器

打製石斧（第8図34～36・図版12-34、35）

34は短冊形を呈する。自然面を残し、両側縁、基部に調整剥離を施している。両側縁に磨滅痕が残る。長さ10.2cm、幅4.3cm、重さ98gをはかる。

35は撥形を呈する。自然面を多く残し、右側縁は打ち欠いたままの面となっている。左側縁には調整剥離を施し整形している。長さ9.6cm、幅5cm、重さ68gをはかる。石質は34が緑色岩、35が砂岩、36がホルンフェルスである。

剥片石器（第8図37・図版12-37）

37は裏面に大きな剥離面を残し、表面は剥離を繰り返し整形している。刃部は細かい調整剥離を施している。長さ3.6cm、幅5cm、重さ14.5gをはかる。石質はチャートである。

磨石（第8図38・図版12-38）

38は下半を欠損する。扁平な面の一部に磨痕がみられる。石質は砂岩である。

石皿（第8図39・図版12-39）

39は大きく欠損するが、両面に擦痕がみられる。石質は石英閃緑岩である。

3：49号住居址

49号住居址は調査区の中央で検出した。遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、南北5.4m、東西5.2mをはかる。主軸方位はN-18°-Wを示す。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。壁高は30cmをはかる。床面は平坦で、炉から柱穴の範囲で特に締りが良好であった。

柱穴は18本検出した。P 1 から P 4 が主柱穴で径36~46cm、深さ65.1~79.3cmをはかる。南側のP 5 は長軸58cm、短軸46cm、深さ29cmの楕円形の掘り込みである。P 5 の南側で径25.5~40cm、深さ42~51.7cmのP 6 から P 8 を検出した。壁際には40本の壁柱穴が巡る。径10~36cm、深さ4.5~49.1cmである。P 1 から P 4 に隣接するP 9 から P 12 の覆土は、関東ロームで埋め戻されており、建て替え前の主柱穴であると想定できる。径26~33cm、深さ51.4~60cmをはかる。P 13 はP 5 に対応する南側の掘り込みで、長軸33.5cm、短軸43cm、深さ23.5cmをはかる。P 13 の南側には、P 10 と P 11 の主柱穴間に径22~36cm、深さ32.5~47.1cmのP 14 から P 17 を弧状に検出した。住居址の東側から北西側にかけて壁柱穴の内側に、建て替えによる拡張前の壁柱穴と思われる小ピットが19本巡っていた。径12~30cm、深さ6.5~43cmをはかる。

炉は石囲炉で、住居址の中央で検出した。炉の東西と南側に礫が残存していた。規模は長軸47cm、短軸43cmの方形を呈し、深さ19cmをはかる。火床部西側のロームは被熱により赤色硬化していた。

遺物は炉体土器、埋甕等は検出されず、住居址覆土下位から纏まって出土した。

出土遺物

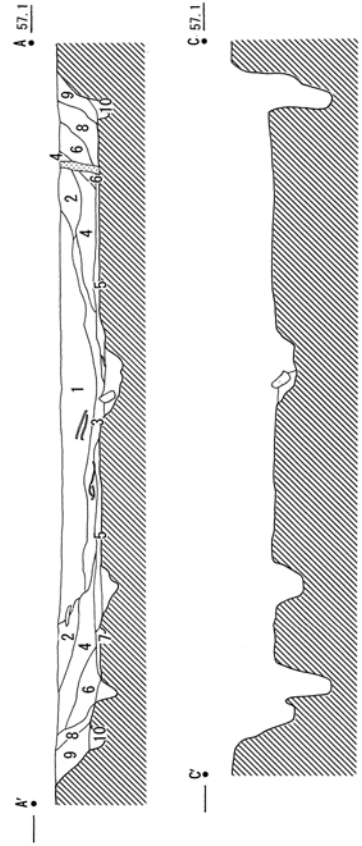
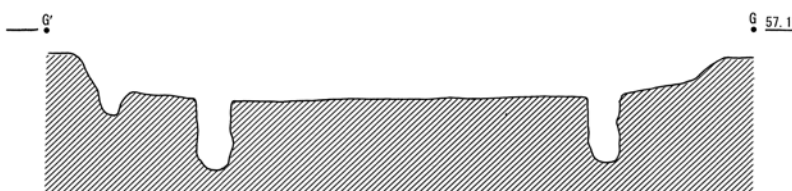
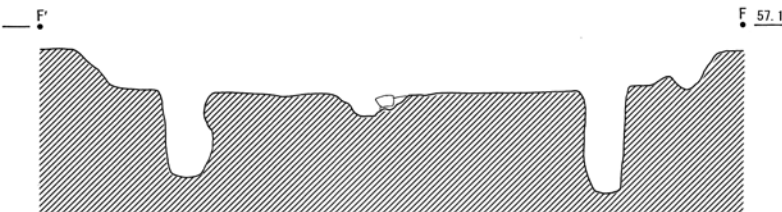
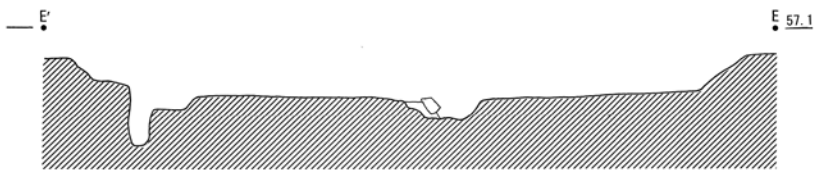
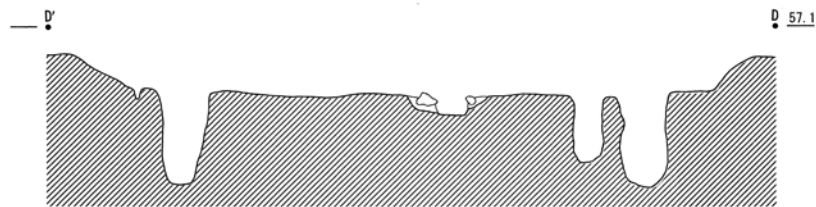
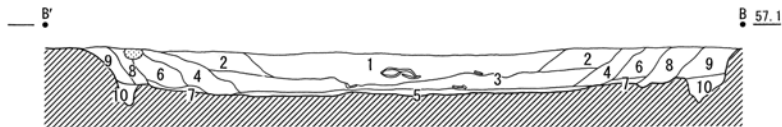
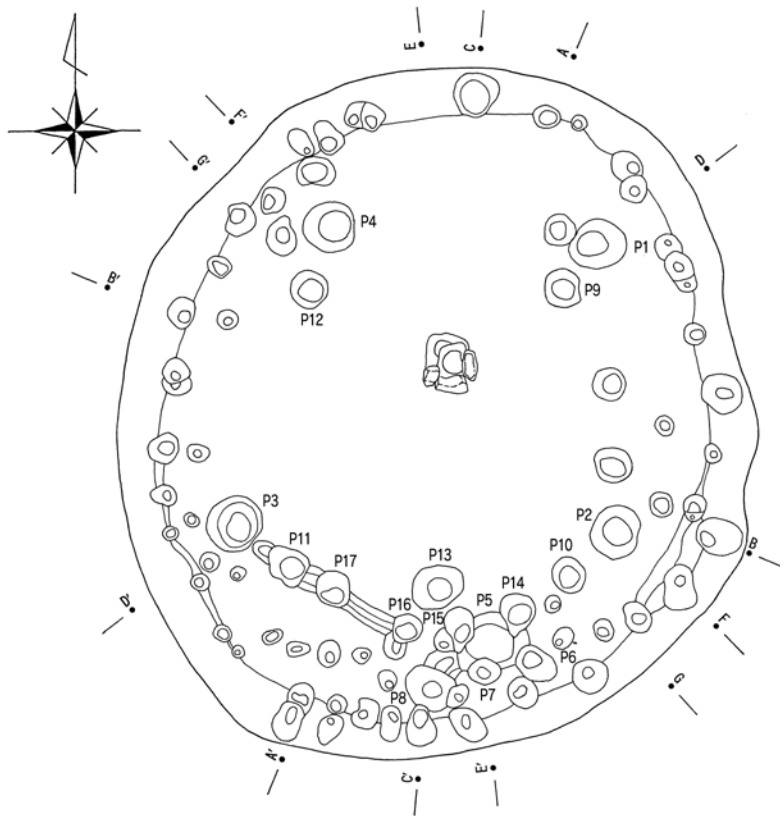
16は炉覆土上面から、59は覆土中位から逆位で出土した。

縄文時代中期中葉土器（第12図1~3、第13図4、5、第14図6~9、第15図10~16、第16図17~27、第17図28~42、第18図43~58、第19図59~66・図版13-1~4、図版14-5~8、図版15-9~12、図版16-13~18、23、25、26、図版17-27、29~32、35、37、38、47、48、図版18-50、53、57~60、62）

1は三角押文を施す土器である。無文の底部から立ち上がり、胴部で窄まり内彎する口縁部に至る所謂キャリパー形の器形である。口唇部には隆帯による渦巻状の小突起を持つ。口縁部は細沈線や三角押文が垂下する。三角押文は口縁部から胴部方向へ施文するものと、胴部から口縁部方向へ施文するものがある。

頸部は2条の波状沈線が横走し、一部連続爪形文を伴っている。胴部は刻み目を持つ波状隆帯が横走し、隆帯に沿って、連続爪形文及び三角押文が施される。口径20cm、器高25.6cmをはかる。

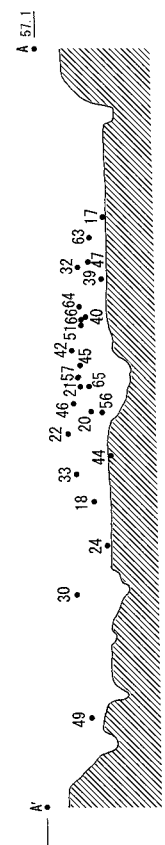
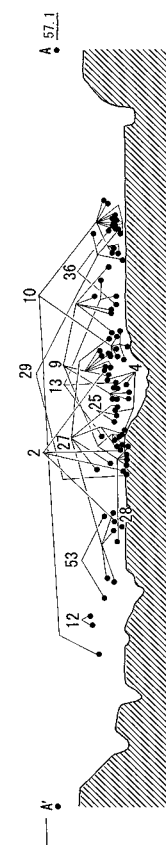
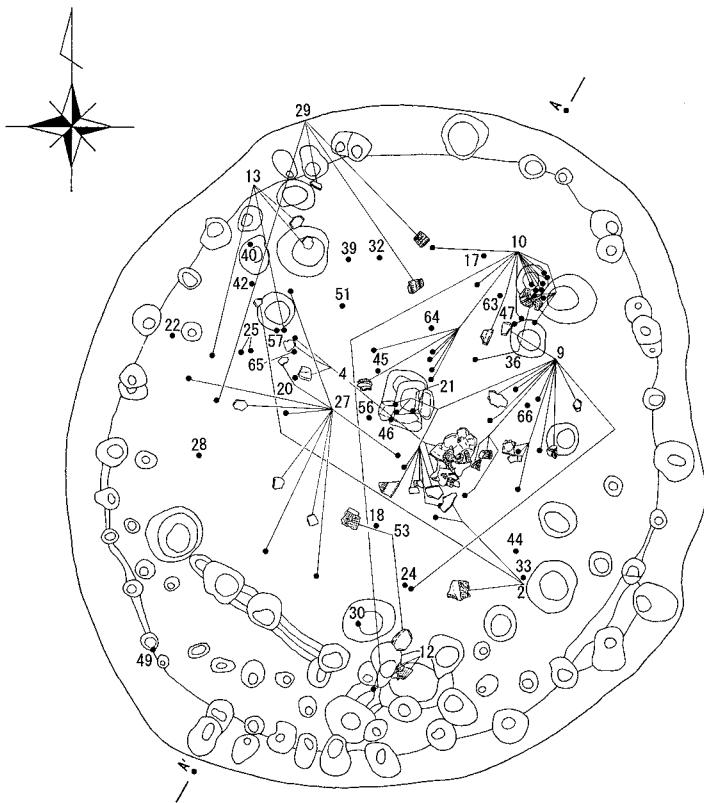
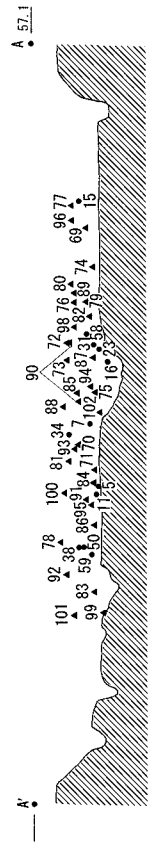
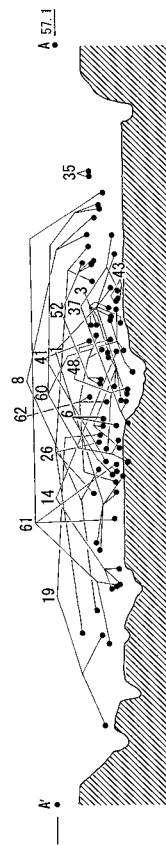
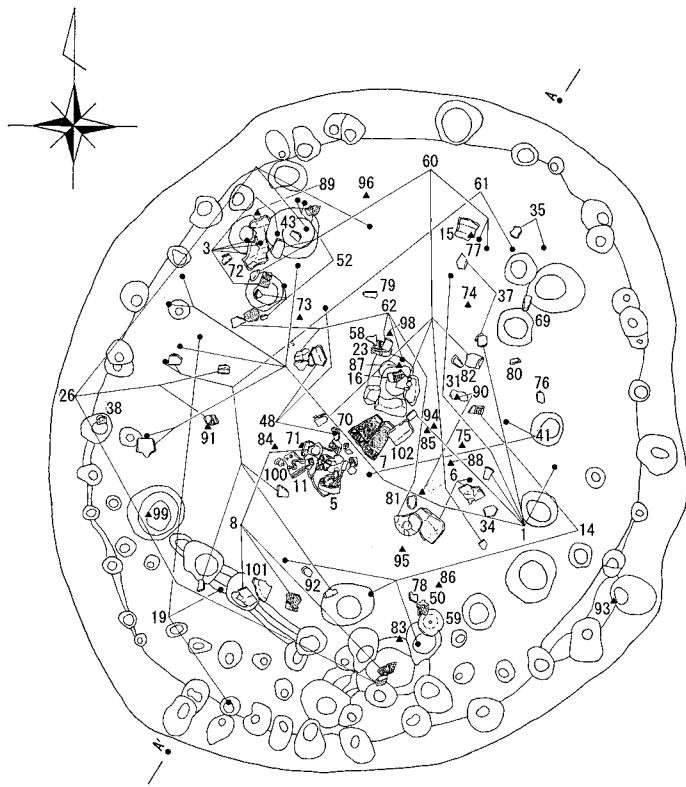
2~5は頸部で外反し、内彎しながら口縁部へ至る器形で、胴部に隆帯による文様が展開する土器である。2は橋状突起を有する。口縁部は無文で、胴部は刻み目を持つ1条の隆帯を横走及び垂下させた区画文と、刻み目を持つ隆帯による大振りな渦巻文で構成される。隆帯脇は沈線状に撫で整形され、隆帯に沿って連続爪形文及び波状沈線が施される。推定口径19.8cmである。3は胴部下半と口縁部に縄文が施される。口縁部突起を有していたと思われ、口唇部に連続爪形文を施した円文が残存している。頸部には楕円区画文を有し、胴部は波状隆帯が横走する。隆帯に沿って連続爪形文と波状沈線が施され、一部区画内に三叉文が施される。推定口径31.3cmである。4は口縁部に隆帯で三角形に文様構成された突起を有する。突起頂部から口唇に沿って刻み目を持つ隆帯が伸び、先端で小突起となっている。刻み目を持つ隆帯により区画された胴部は隆帯により波状に横位展開し三角形区画文や渦巻状の文様を作出している。隆帯脇は沈線状に撫で整形されている。区画内は沈線を巡らせ、半截竹管による集合沈線が施される。施文順位は



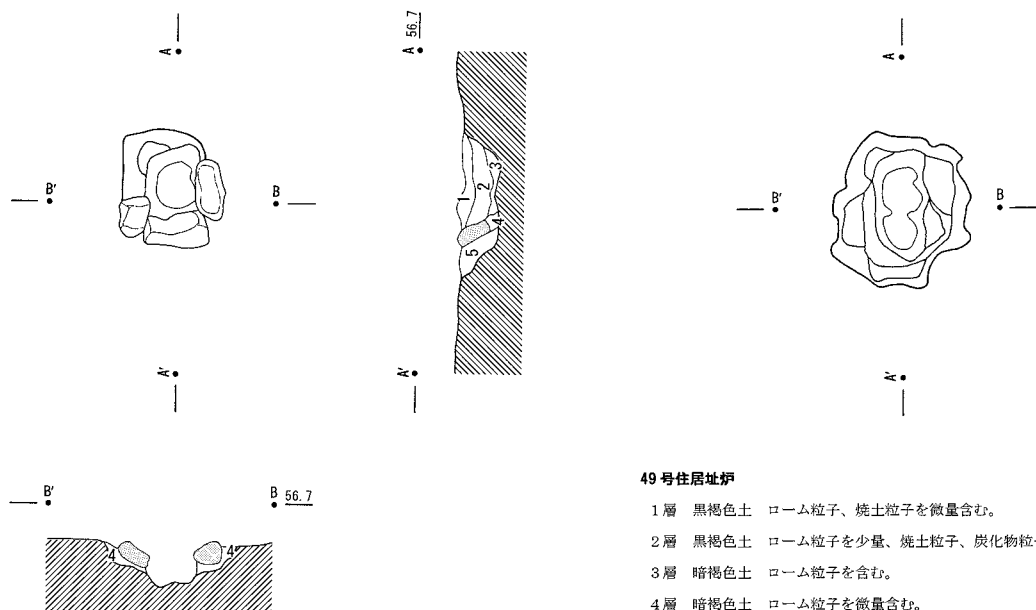
49号住居址土層

- 1層 黒褐色土 ローム粒子を極微量、炭化物粒子を微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を少量、炭化物粒子を極微量含む。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を少量、炭化物粒子を微量含む。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 5層 暗褐色土 ローム小ブロックを微量、ローム粒子、炭化物粒子を極微量含む。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 7層 暗褐色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 8層 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。
- 9層 暗黄褐色土 ローム粒子を多量含む。
- 10層 暗黄褐色土 ローム粒子を少量含む。

第9図 49号住居址 (1/60)



第10图 49号住居址遺物出土狀況図 (1/60)



第11図 49号住居址 炉 (1/30)

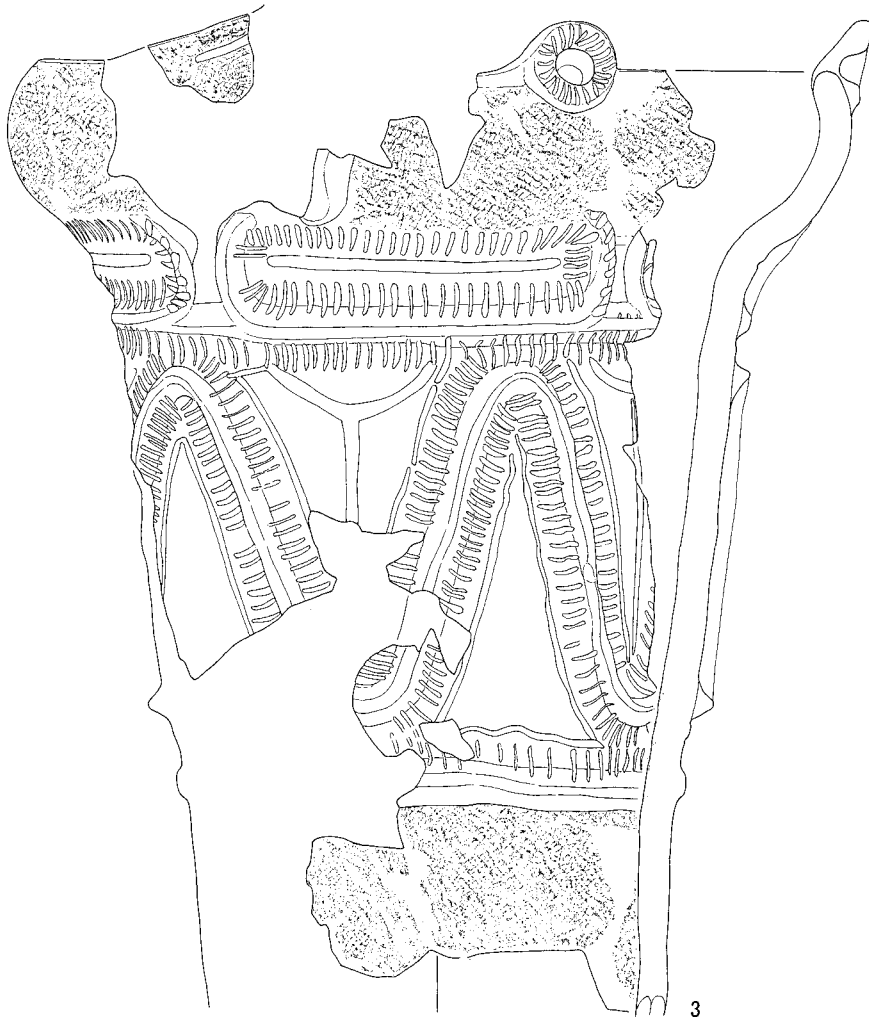
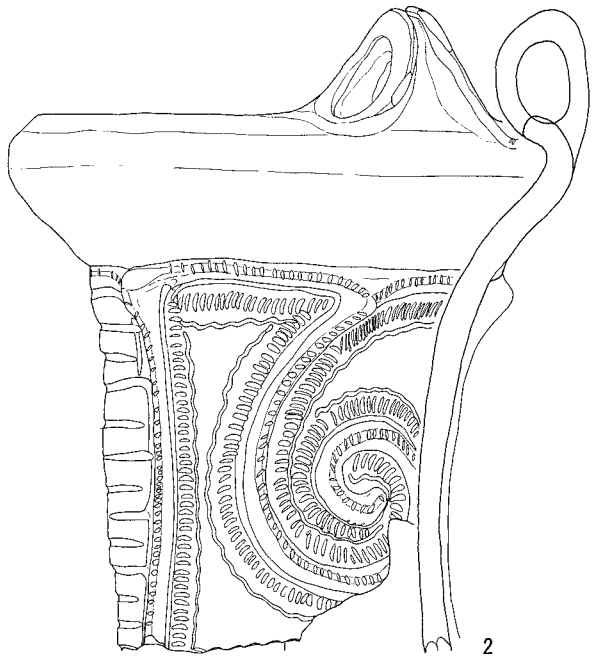
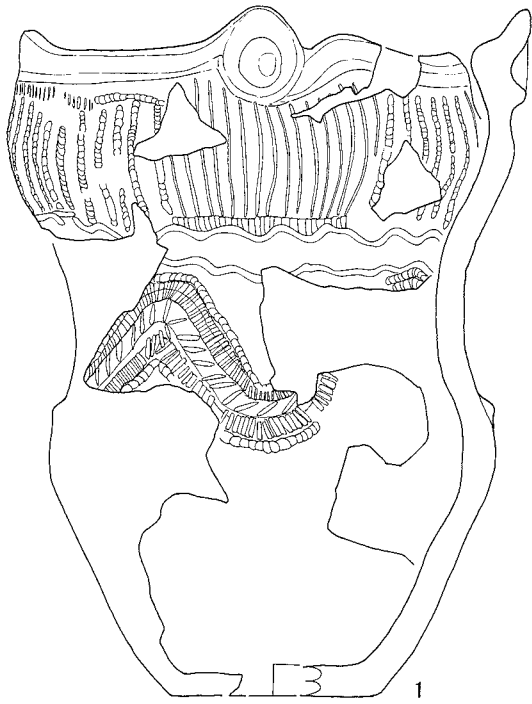
隆帯→隆帯脇沈線→隆帯上の連続爪形文→区画内沈線→集合沈線の順である。口径23.4cm、底径7.8cm、器高28cmをはかる。

5は口縁部突起及び底部を欠損する。口縁部突起から刻み目が施された隆帯が伸び、口縁部上端から楕円形の隆帯が垂下している。胴部は刻み目を持つ隆帯が4単位垂下し区画文としている。垂下した隆帯から半円形や渦巻状などの文様が描かれている。隆帯によって作出された区画内には沈線、連続爪形文や半截竹管による連続刺突文、三叉文が施される。口径24cmをはかる。6は底部から外傾しながら直線的に立ち上がる器形である。口縁部には縄文が施される。縄文は胴部文様帯を区画している横走する隆帯上にも及んでいる。胴部文様帯は横走する隆帯により文様区画され、2条の垂下する隆帯による長方形区画と区画中央の円文から斜位に伸びる隆帯による文様構成となる区画からなる。長方形区画の一方は垂下する隆帯中位が「U」字状に突出し、区画内は縦位に楕円区画文が並ぶ。長方形区画や円文などで文様描出された区画内は隆帯に沿って半截竹管による沈線文、連続爪形文及び半截竹管による連続刺突文が施される。口径20.4cm、底径9cm、器高23.8cmをはかる。

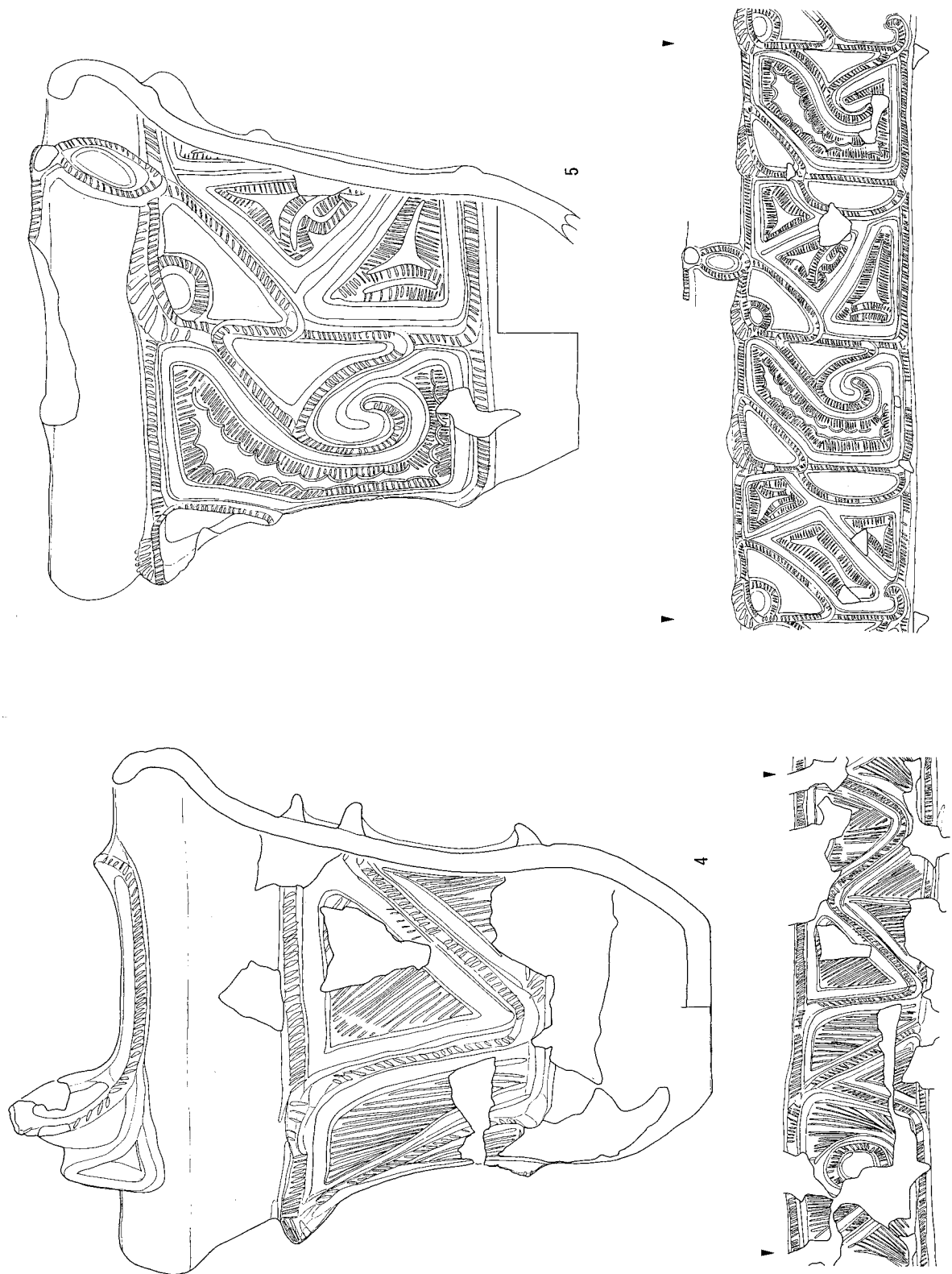
7、8は底部からやや外傾しながら口縁部へ至る器形で、口縁部に4条の沈線による鋸歯文が巡り、連続爪形文、半截竹管による連続刺突文が施される土器である。

7は地文縄文であるが、底部付近は施文していない。横走する刻み目を持つ隆帯から隆帯が4単位垂下している。口径21.6cm、推定底径10cm、器高28.3cmをはかる。8の胴部文様帯は沈線により区画され、刻み目を持つ波状隆帯が小文字「R」字状に横走する。波頂部の隆帯は肥厚している。隆帯によって出来た区画内は沈線、連続爪形文、半截竹管による連続刺突文及び交互刺突文や集合沈線が施されている。口径14.6cm、底径6.8cm、器高20.4cmをはかる。

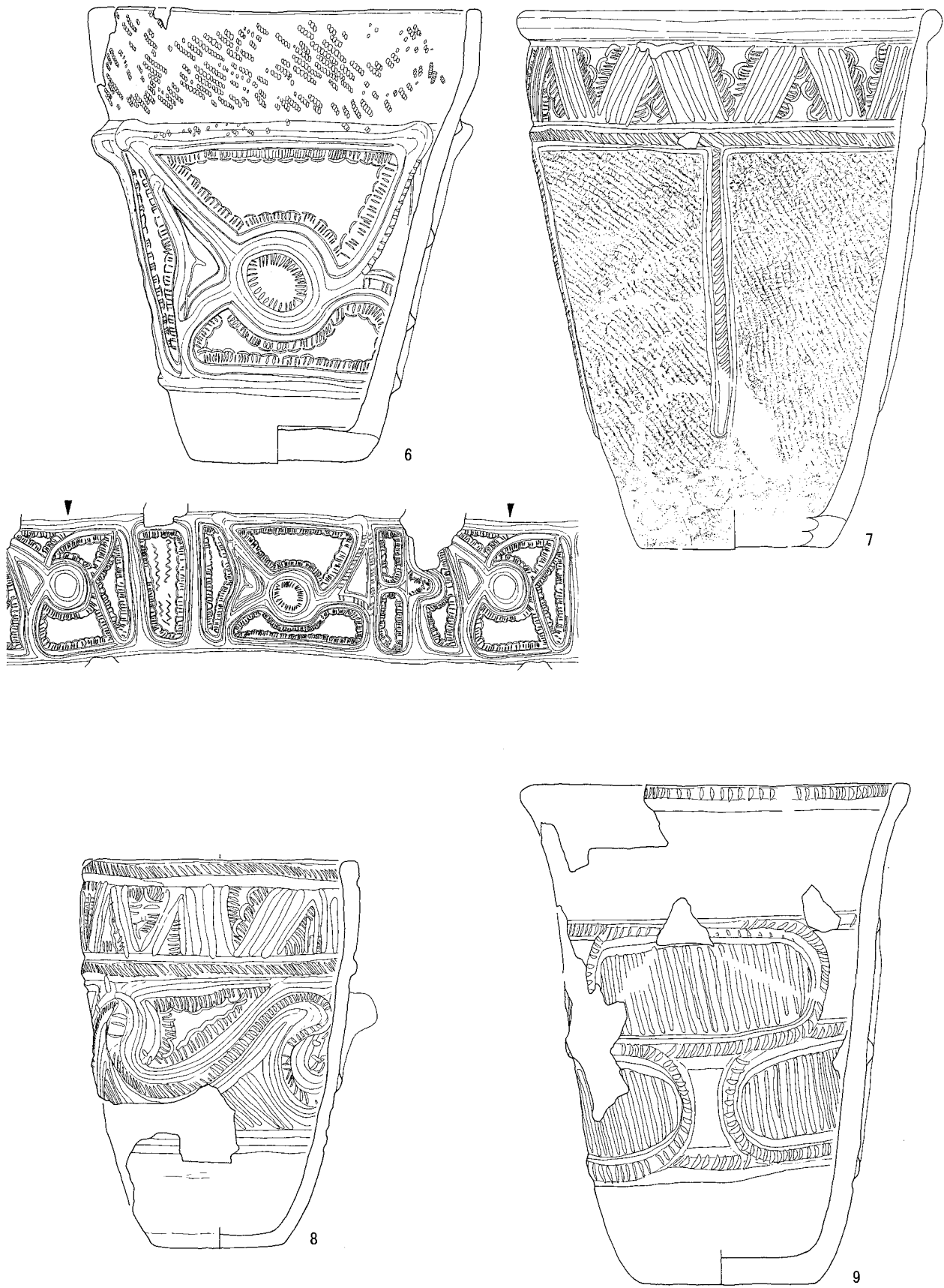
9、10は胴部に楕円区画文が巡る土器である。9は底部から直線的に立ち上がり、口縁部で外反しやや開く器形である。口縁に沿って連続爪形文が巡っている。胴部は刻み目を持つ隆帯による楕円区画文が半単位ずらして2段施文される。区画内は半截竹管による集合沈線を施した後、隆帯脇を棒状工具により撫で整形している。口径20.3cm、底径9.3cm、器高26.5cmをはかる。



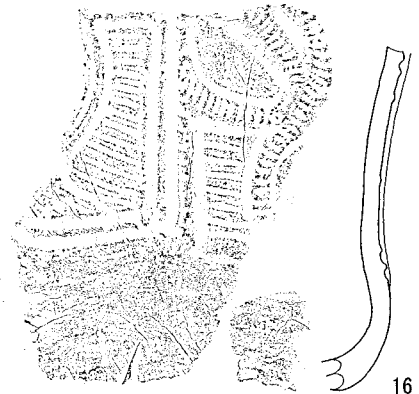
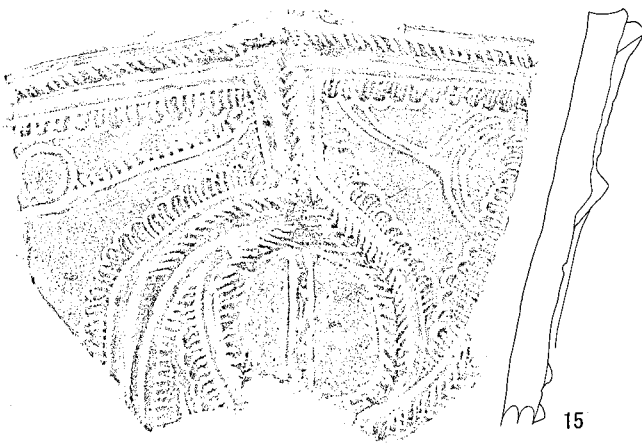
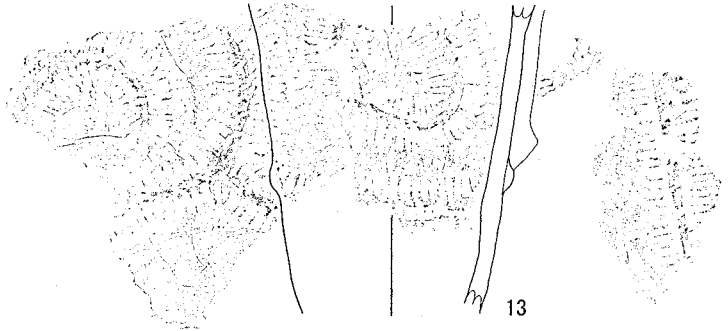
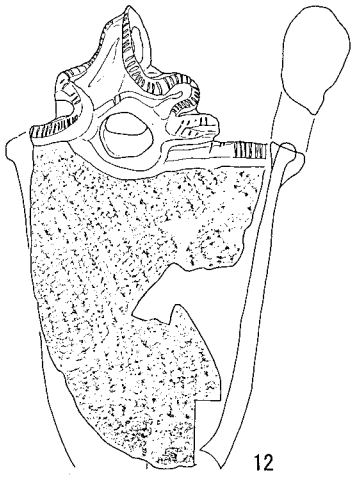
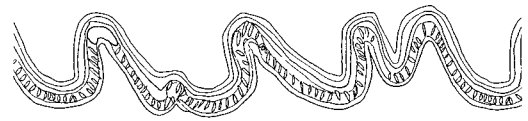
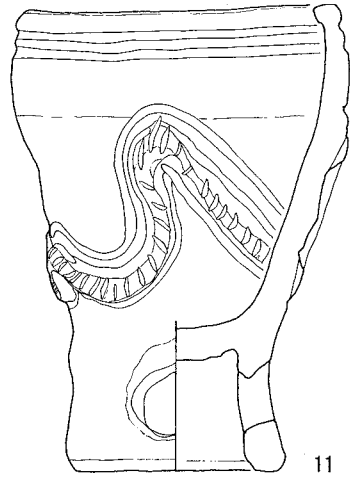
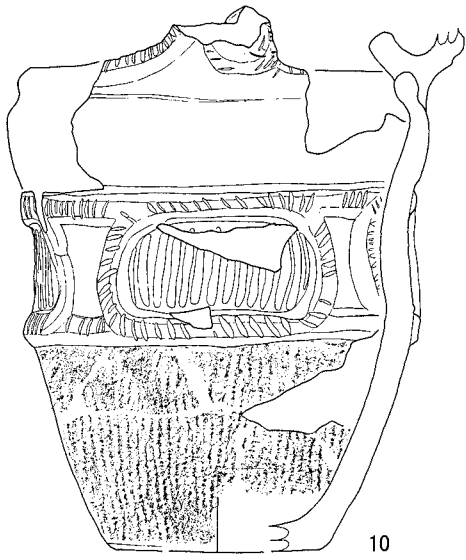
第12图 49号住居址出土遺物 (1) (1/3)



第13図 49号住居址出土遺物 (2) (1/3) 但し、展開図は (1/6)



第14図 49号住居址出土遺物 (3) (1/3) 但し、展開図は (1/6)



第15図 49号住居址出土遺物 (4) (1/3) 但し、展開図は (1/6)

10は口縁部に刻み目を持つ隆帯による橋状把手となる突起を1単位有しているが欠損している。胴部は刻み目のある隆帯による楕円区画文が4単位描かれ、区画内には集合沈線が充填されるが、1単位のみ連続爪形文及び波状沈線が施されている。胴部下半の縦位縄文は隆帯添付後に施文されている。口径14.8cm、底径8cm、器高19.3cmをはかる。

11は高台付きの小形の土器で、高台からやや外反しながら立ち上がり、口縁部で弱く内彎している。高台部には4箇所円窓を有している。口縁部には2条の沈線が横走し、胴部は刻み目を持つ波状隆帯がうねる様に展開する。隆帯は沈線で撫で調整され、隆帯に沿って1条の沈線が施文される。胴部上半から器内面にかけて朱が認められる。口径12.3cm、底径8cm、器高18.4cmをはかる。

12は口縁部から胴部の破片である。やや外傾しながら直線的に口縁部に至る器形である。口縁部には口径に対して大柄な突起が付く。刻み目のある隆帯がうねる様に左右に施され、先端は円形の窪みを有する。基部は円窓となっている。胴部は縄文が施される。13は胴部の破片で、刻み目のある隆帯による渦巻文が横位に展開している。隆帯に沿って連続爪形文が施される。

14は口縁部から胴部の破片で、やや外傾しながら立ち上がる円筒形の土器である。地文に縄文を施している。口縁部から2条一対の隆帯が垂下し、隆帯間には低い隆帯による円文が施される。縄文は円文上にも施文されている。垂下する隆帯下端の胴部境は弱い段を持っており、胴部の器壁の方がやや薄くなっている。胴部には扁平な隆帯が弧状に施される。推定口径11.4cmである。

15は横走する隆帯から垂下した1条の隆帯は、円文や弧状に垂下する文様を作出する。隆帯は断面三角形で、三角形の片面や両面に連続爪形文を施している。両面の場合は綾杉状となる。隆帯に沿って半截竹管文、連続爪形文及び波状沈線が施される。区画内は比較的空間を残し、沈線による円文、三叉文及び交互刺突文が施文される。16は底部から内彎しながら立ち上がり、胴部で窄まる器形である。胴部は刻み目のある隆帯で円文や方形の区画をするパネル文系で、区画内は集合沈線が施される。

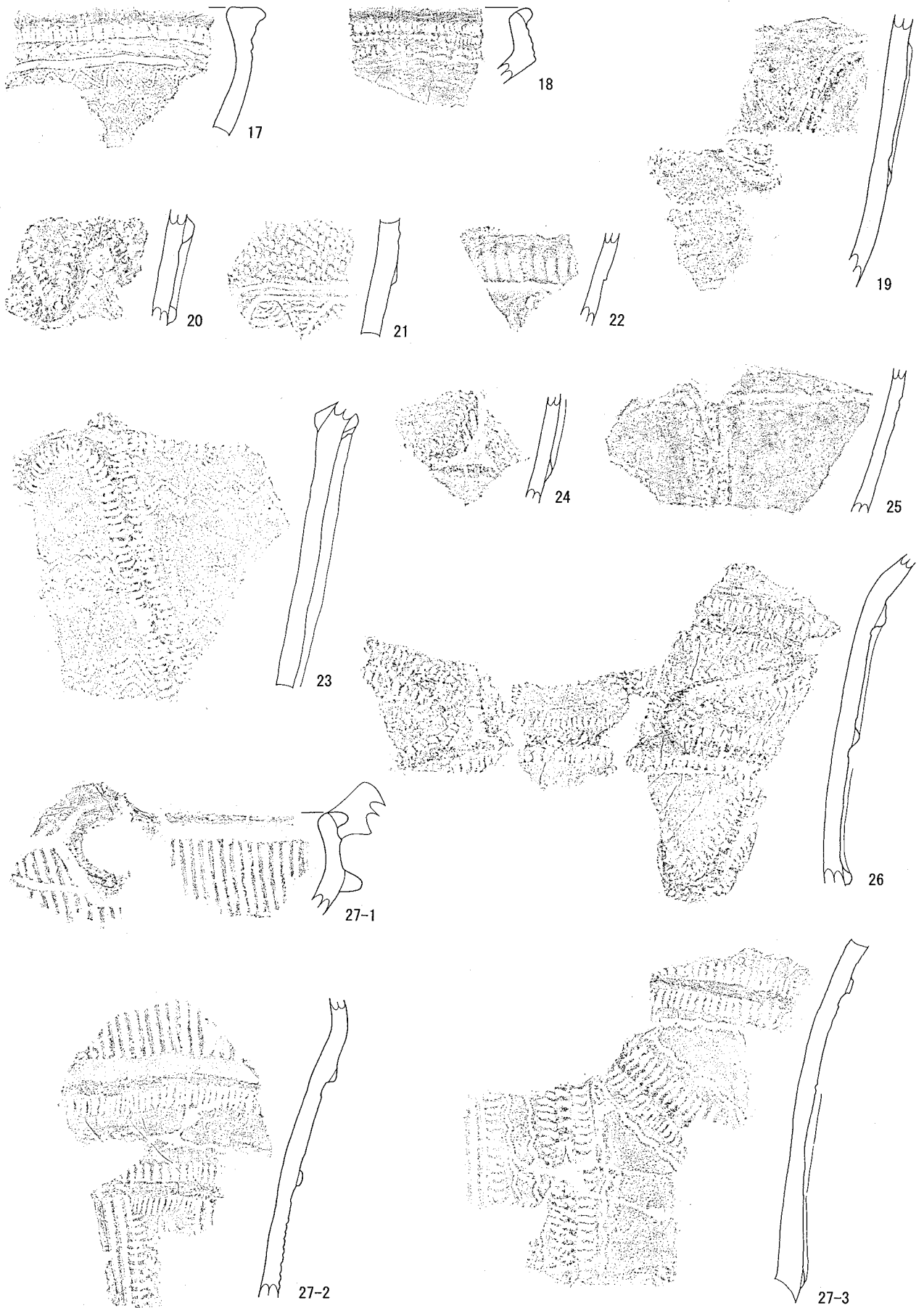
17～21は角押文を施す土器である。

17は鉢形、18は浅鉢形土器で、17は口縁部を肥厚させ、口唇部が平坦になっている。口縁に沿って1条の角押文、三角押文、沈線さらに2条の波状沈線が横走する。18は口縁部が粘土紐によって肥厚している。口縁に沿って幅の異なる2条の押引文が横走及び波状に施される。屈曲する頸部以下は無文となる。

19、20は胴部で、波状隆帯が横走し、隆帯に沿って押引文を施している。21は胴部中位に段を有し、地文に縄文を施す。段以下は沈線及び押引文を波状に施文し、沈線間に爪形文を施している。22は胴部で、輪積を残すように段を持たせ、ヒダ状の文様が横走する。

23～29は胴部に隆帯による三角形区画や山形の文様を施す土器である。

23は胴部破片で、上端で大きく屈曲するようである。屈曲部に沿って隆帯を横走させ、連続爪形文を沿わせている。隆帯から山形の隆帯が垂下する。断面三角形の隆帯の両側に連続爪形文が施され、隆帯から2条一対の波状沈線が横走する。24、25は胎土に金雲母を含んでいる。24は隆帯が横走及び弧状に垂下し、連続爪形文が施される。25は三角押文及び波状文が横走及び垂下している。26は外傾しながら立ち上がり無文の頸部で大きく外反する。横走する隆帯により胴部を区画し三角形区画文や山形文としている。隆帯上は刻み目を持ち、隆帯に沿って連続爪形文が施される。27は口縁部から胴部の破片である。口縁部突起を有するが橋状把手が欠損している。口縁部は半截竹管による集合沈線を垂下させ、上下を撫で調整している。2条の連続爪形文を伴う隆帯により区画された頸部は波状沈線が横走する。胴部は刻み目のある隆



第16图 49号住居址出土遗物 (5) (1/3)



第17图 49号住居址出土遗物 (6) (1/3)

帯や半截竹管文を垂下させ縦区画とし、斜位に垂下する隆帯による文様構成となるようである。隆帯に沿って連続爪形文及び波状文が伴う。29は3条の隆帯を横走させ横帯区画とし、隆帯による楕円区画文や三角形、平行四辺形区画としている。いずれの隆帯も連続爪形文が伴う。中段は波状沈線が横走する。

30～35は楕円区画文を有する土器である。

30、31は頸部から内彎する口縁部の破片で、同一個体の可能性が高い。口縁部は突起を欠損しているが、隆帯による渦巻文が残存している。口縁部は刻み目を持つ隆帯による不整円形の区画文で、区画内は集合沈線が垂下し、沈線間は連続爪形文や交互刺突文を施している。頸部は2段の楕円区画文と思われ、隆帯に沿って半截竹管による2条の沈線が巡る。区画内は集合沈線が垂下している。32は頸部で、刻み目を持つ横走する隆帯と隆帯片側に刻み目を持つ隆帯による楕円区画文と思われる。区画内は半截竹管による浅い沈線が垂下している。34も刻み目のある隆帯による楕円区画文と思われる。隆帯脇の調整は沈線となる。区画内は集合沈線が垂下し、沈線間は連続爪形文となっている。35は刻み目を持つ隆帯による頸部楕円形区画文から斜位に垂下する隆帯や弧状隆帯による胴部文様を持つ。隆帯脇は沈線となる。楕円区画内は集合沈線が弧状に垂下する。胴部は隆帯に沿って連続爪形文、波状沈線や半截竹管による連続刺突文が施され、区画内は沈線による三叉文を施文する箇所もある。

36は胴部破片で、隆帯による渦巻文などの文様構成となる。隆帯脇は半截竹管による沈線が施され、区画内は集合沈線が充填されている。37は胴部下半から底部の破片で、横走する隆帯に沿って連続爪形文及び波状沈線が施される。隆帯以下は無文である。38は円筒形の口縁部破片で、口縁部器内面はやや肥厚している。隆帯及び半截竹管による5条の沈線による山形文が垂下し、連続爪形文、半截竹管による刺突文及び円文が施される。補修孔が1箇所穿たれている。

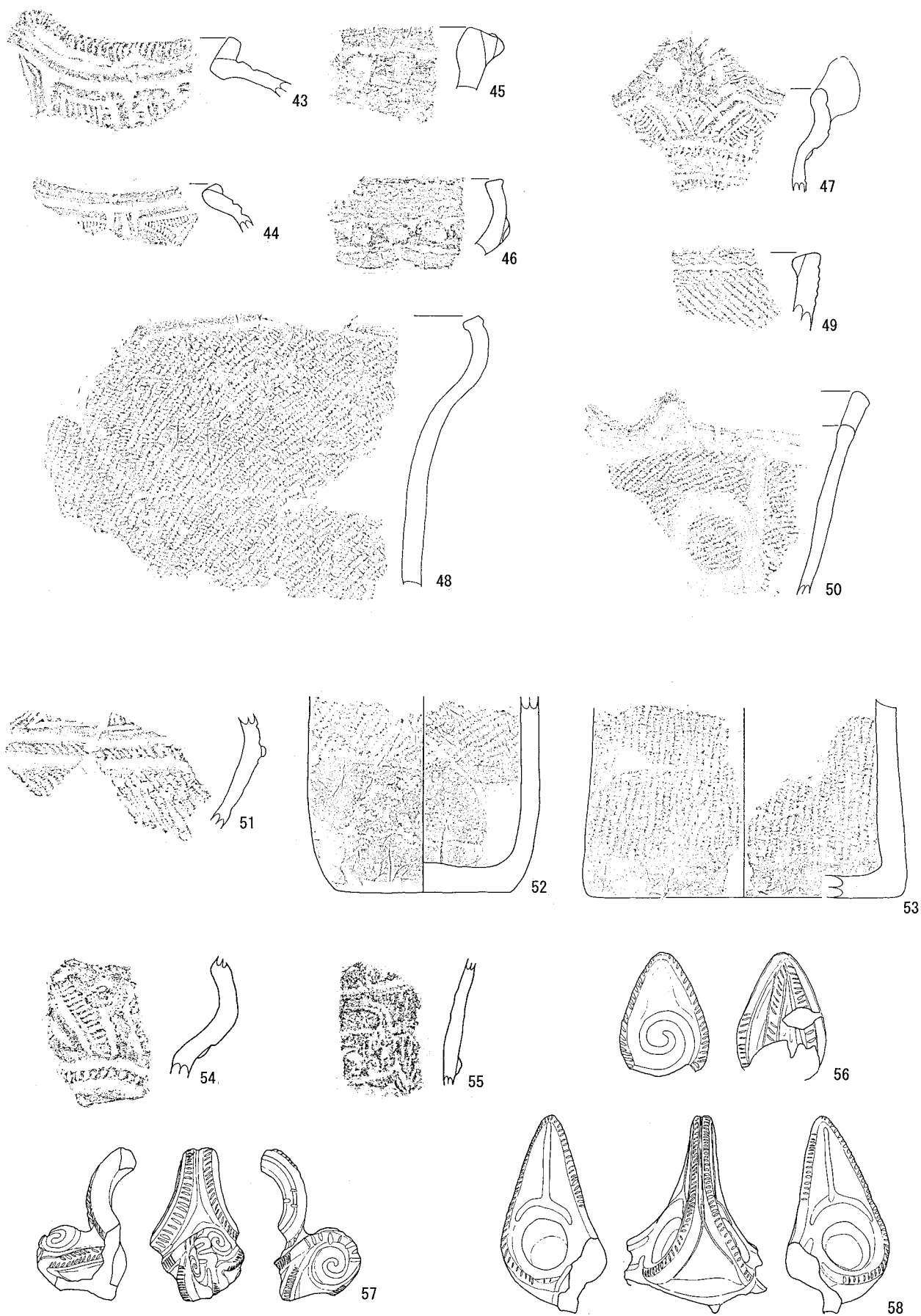
39～47は比較的小形の土器の口縁部である。

39、40は内彎する口縁部で同一個体の可能性がある。刻み目のある隆帯により頸部を区画し、口縁部は集合沈線が垂下するが、1箇所連続爪形文及び半截竹管による連続刺突文となっている。41、42は内彎する無文の口縁部で口唇部に刻み目を持つ隆帯が横走する。42は連続爪形文が渦巻状に施された突起を有する。43、44は粘土紐の添付による短い口縁部から大きく開く器形となる。43は口唇部に刻み目を持つ。胴部は半截竹管による縦位の区画文と思われ、区画内は集合沈線や交互刺突文が垂下している。44の胴部は半截竹管による沈線による区画文と思われ、区画内は連続爪形文及び彫刻的な三叉文となっている。

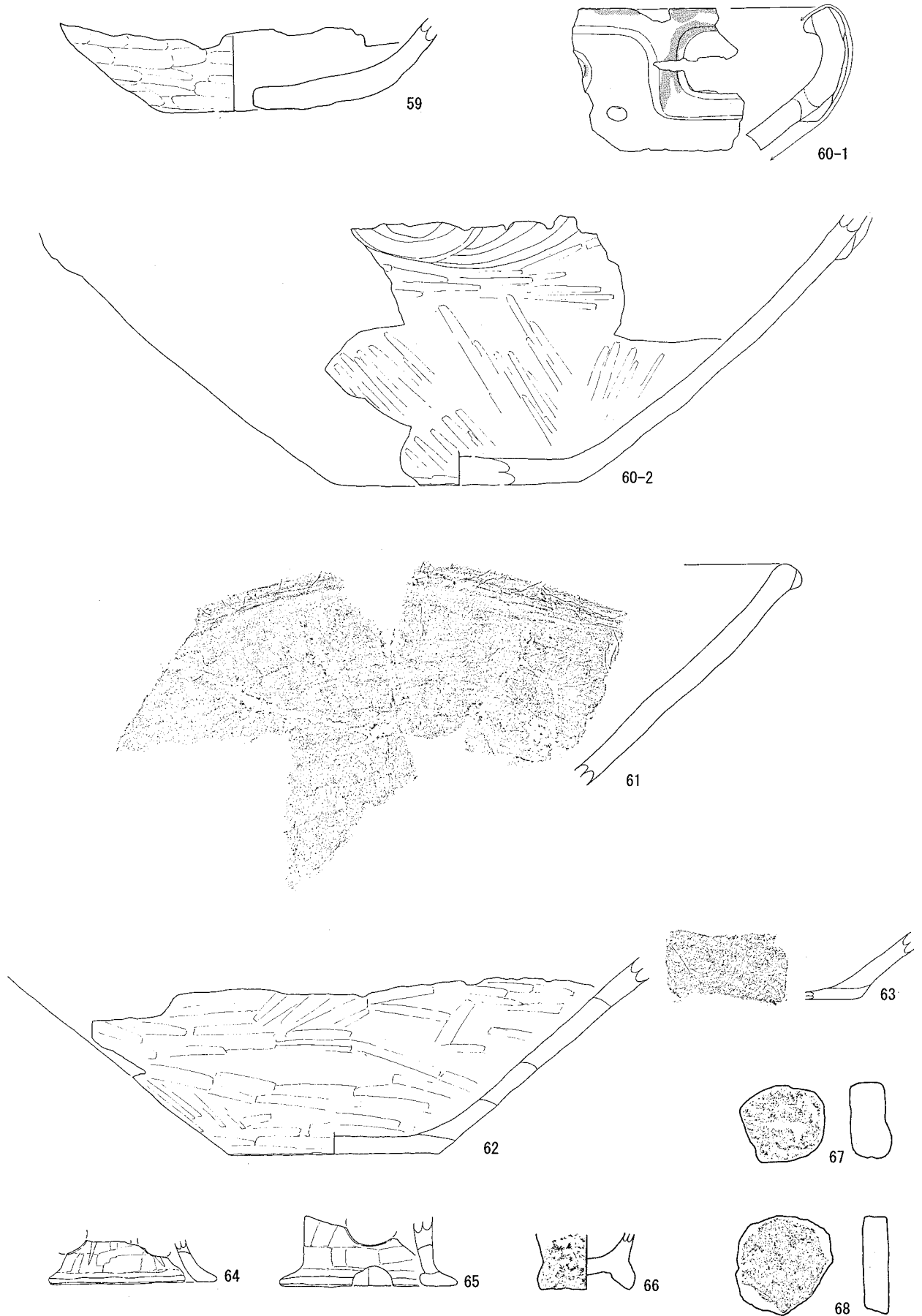
45、46は内彎する無文の口縁部に指頭状の圧痕を有する隆帯が、45は口縁部直下に、46は中位に横走する。47は内彎する口縁部から頸部で窄まる器形である。口縁に山形の突起を有し、突起頂部から弧状に垂下する隆帯による円形の窪みを持つ。口縁部は3条の沈線が鋸歯状に配され、連続爪形文が施される。刻み目のある隆帯により区画された頸部は無文である。

48～53は地文に縄文が施される土器である。

48は直線的に立ち上がる胴部から外傾し、内彎する口縁部に至る。口縁部は粘土紐を貼り付けた狭い無文部となる。49は口縁内面が肥厚する。口縁端部に波状沈線が横走する。50はやや外傾しながら直線的に立ち上がる器形で、口縁部に2組の山形突起を有する。口縁端部及び山形突起部は肥厚している。口縁直下の狭い無文部から無文の凹線が垂下し円文を描いている。51は刻み目を持つ隆帯が横走し、2条の沈線が横走及び斜位に垂下している。52、53は胴部から底部である。底部から直線的に立ち上がるが、53はやや内傾しながら立ち上がる。胴部下端は無文となっているが、52は無文部の幅が広い。



第18图 49号住居址出土遺物 (7) (1/3)



第19図 49号住居址出土遺物 (8) (1/3) 但し、67、68は (1/2)

54、55は小形土器である。54は内彎する口縁部から頸部で窄まる器形である。口縁部は沈線が斜位に垂下し、一部に連続爪形文が施される。頸部は刻み目を持つ隆帯が横走している。55は薄手の胴部で、2条一対の沈線が横走及び弧状に垂下し、連続爪形文が施された波状隆帯の波頂部へ至る。

56～58は口縁部突起である。56は山形を呈し、側縁に刻み目が施されている。外面は波頂部から刻み目を持つ2条の隆帯が垂下している。内面は沈線による渦巻文が描かれている。57は橋状把手の破片で、爪形文を伴う。側縁部の一方には1条の沈線と交互刺突文が施される。橋状把手基部は円形の突起となっており、左面は交互刺突文を施す渦巻文となる。右面は綾杉状の刻み目を持つ隆帯が上下に分かれ、渦巻文を作出している。58は眼鏡状把手で、隆帯上に刻み目が施される。円窓から波頂部の左右面に三叉文が描かれている。内面は無文である。

59～63は浅鉢形土器である。

59は底部と胴部の境が不明瞭で、緩やかに立ち上がる。底部中央付近に円孔が穿たれている。60は内彎する口縁部で、口縁部から垂下する幅の広い隆帯による文様構成となる。補修孔が1箇所認められる。口縁部から器内面にかけて、朱や黒色顔料により渦巻文や円文が描かれている。推定底径13cmである。61は胴部から直線的に口縁部へ至る器形で、口縁部が隆帯により肥厚している。62、63も底部から直線的に立ち上がる器形で、62は底径11.4cmをはかる。63は胎土に金雲母を含んでいる。

64、65は台付き深鉢の脚部で、円窓を持つ。65の底面は粘土紐を貼り付け外側へ大きく広がっている。推定底径は64が9cm、65が9.6cmである。66はミニチュア土器の底部で、粘土紐により高台を作出している。高台径3.3cmをはかる。

土製品

土製円盤（第19図67、68・図版18-67、68）

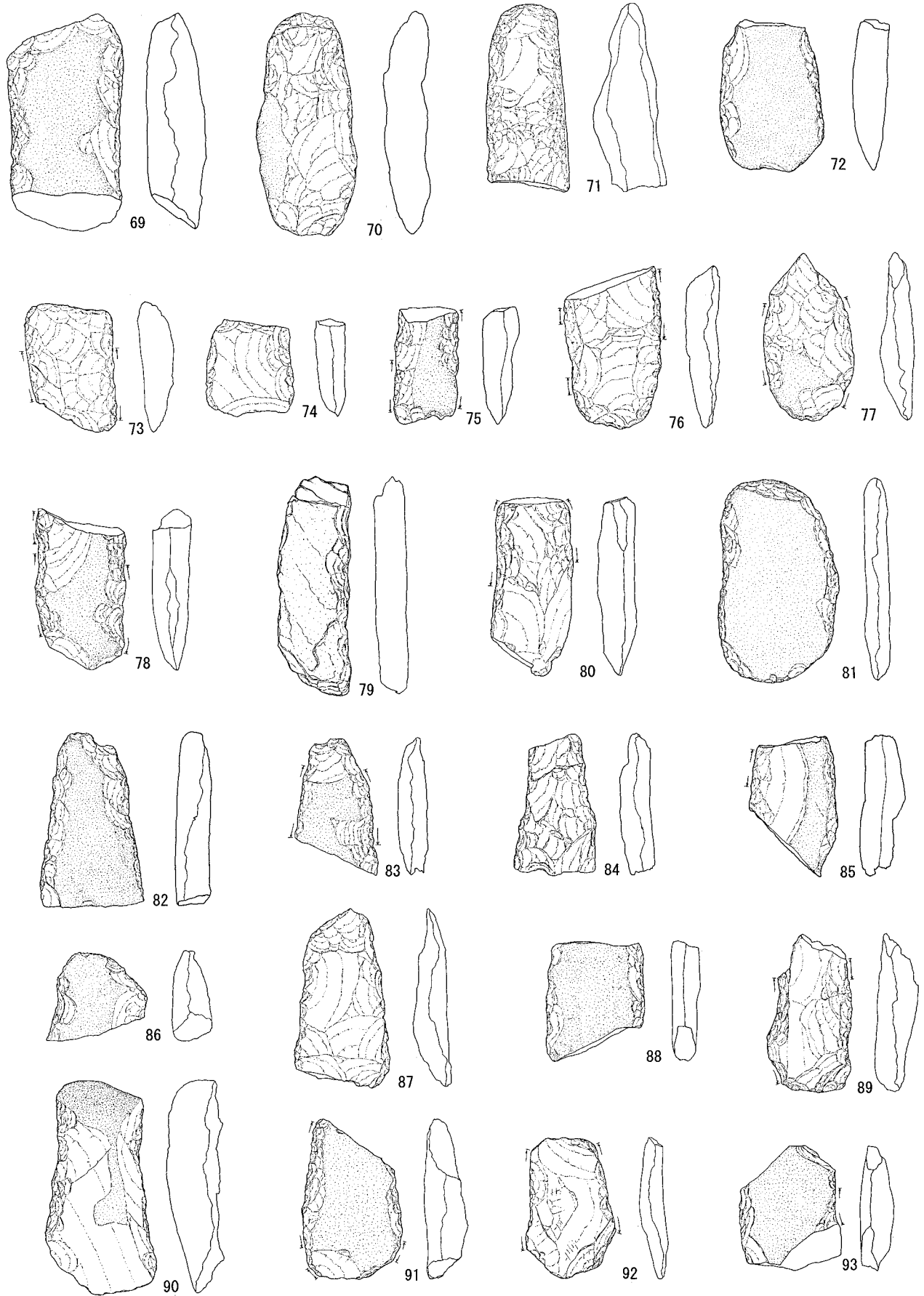
67、68は無文で、周辺部磨調整がみられる。67は最大径3cm、重さ11.7g、68は最大径3.6cm、重さ14.7gをはかる。

石器

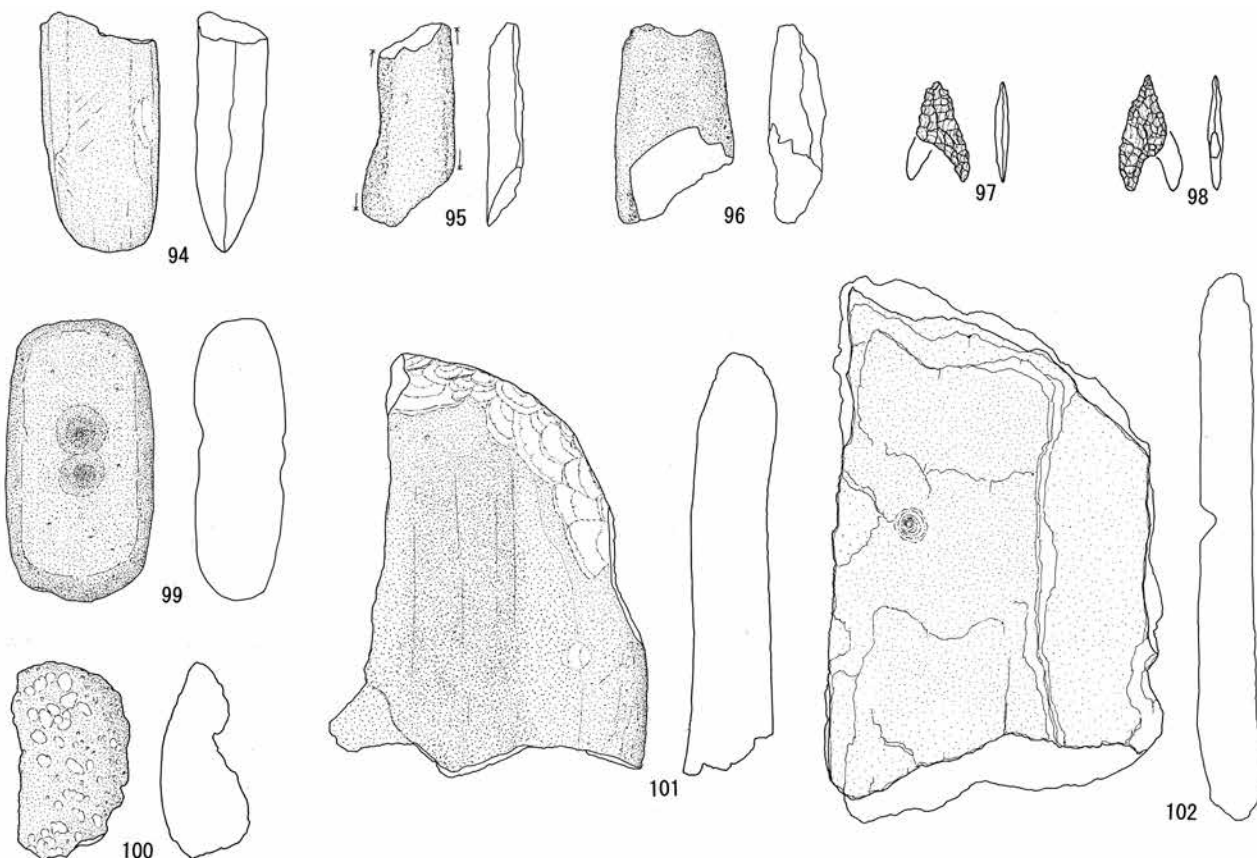
打製石斧（第20図69～93・図版19-69～88、図版20-89～93）

69～81は短冊形を呈する。両側縁に調整剥離を施している。69、71、73は刃部を、72、75～80は基部を、74は基部と刃部を欠損する。69は自然面を多く残し、厚みがある。72、81も自然面を多く残し、扁平な器形である。81は刃部左側が磨耗している。長さ11.1cm、幅6.5cm、重さ132gをはかる。70は刃部に磨耗痕がある。長さ12.1cm、幅5.5cm、重さ187gをはかる。71は厚みがあり、右側縁部は自然面となる。73、75～78、80は両側縁に磨滅痕が残る。76、77は刃部に磨耗痕が認められる。80の基部は自然面となっている。石質は69～78が砂岩、79が黒色片岩、80が珪質頁岩、81がホルンフェルスである。

82～93は撥形を呈する。両側縁に調整剥離を施している。82、83、86、87は刃部を、89、91、93は基部を、84、85、88は刃部と基部を欠損する。82、83、85、86、88、90、91は自然面を多く残す。83、84、89、91、92は両側縁に、85は左側縁に、93は右側縁に磨滅痕が認められる。90は厚みがあり、長さ11.5cm、幅6cm、重さ214gをはかる。92は長さ7.6cm、幅4.9cm、重さ63.7gをはかる。石質は82～87が砂岩、88～90がホルンフェルス、91～93が珪質頁岩である。



第20图 49号住居址出土遗物 (9) (1/3)



第21図 49号住居址出土遺物 (10) (1/3) 但し、97、98は (1/2)

磨製石斧 (第21図94・図版20-94)

94は基部を欠損している。細長い自然石をそのまま用い、表裏面及び刃部を磨いて整形している。石質は緑色片岩である。

敲石 (第21図95、96・図版20-95、96)

95、96は基部、先端部及び裏面を欠損する。95は裏面欠損後の両側縁に敲打による磨滅痕が残っている。石質は95が礫岩、96が砂岩である。

石鏃 (第21図97、98・図版20-97、98)

97、98は基部に抉りをもつが、基部の一部が欠損する。97は長さ2.6cm、98は長さ3cmをはかる。石質は97がチャート、98が黒耀石である。

磨石 (第21図99、100・図版20-99、100)

99は長方形を呈する。両面に磨痕がみられ、表裏に2箇所の窪みを有する。長さ10.9cm、幅5.9cm、重さ408.6gをはかる。石質は石英閃緑岩である。100は楕円形を呈すると思われる。表面が多孔質である。

石皿 (第21図101、102・図版20-101、102)

101は欠損しているが、楕円形を呈すると思われる。扁平な器形で、先端部から右側縁部を調整剥離により整形している。凹面には擦痕がみられる。102は大きく欠損している。中央に窪みが1箇所認められる。石質は101が砂岩、102が緑色片岩である。

4：50号住居址

50号住居址は調査区中央南側で検出した。遺存状態は良好である。平面プランは円形を呈し、南北5.6m、東西6.1mをはかる。主軸方位はN-22°-Eを示す。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。壁高は44cmをはかる。床面は平坦であるが、中央に向かって僅かに傾斜が認められた。炉から主柱穴の範囲では特に締りが良好であった。柱穴は19本検出した。P1からP6が主柱穴で径32~46cm、深さ48~64.8cmをはかる。P1からP5間には、幅11~20cm、深さ5~8cmの溝が柱穴を繋ぐように巡っていた。壁際には26本の壁柱穴が巡る。径13~39cm、深さ7.5~47cmをはかる。

P7からP12は、覆土に関東ロームを埋め戻しており、建て替え前の主柱穴であると想定できる。径30~53cm、深さ51.4~60cmをはかる。P12の南側にはP1とP5の主柱穴間に建て替えによる拡張前の壁柱穴と思われる小ピットが8本巡っていた。径12~26cm、深さ10.9~52cmをはかる。

炉は3基検出した。1号炉が2号炉より新しく、3号炉が1番古い。1号炉は埋甕炉で、住居址中央北寄りで検出した。炉の中心に土器（第25図1）を埋設していた。規模は径40cmの円形を呈し、深さ25cmをはかる。火床部のロームは被熱により硬化していた。1号炉の南側で重複する2号炉を検出した。土器は埋設されていなかった。規模は長軸60cm、短軸43cmの楕円形を呈し、深さ21cmをはかる。火床部のロームは被熱により硬化していた。2号炉の南側で検出した3号炉は地床炉で、規模は長軸41cm、短軸33.5cmの楕円形を呈し、深さ4cmをはかる。火床部のロームは被熱により硬化していた。炉を中心に半径1.5mの範囲で柱穴と考えられるP13からP19が巡っており、小形の住居址が重複していた可能性が高いと考えられる。柱穴の規模は径18~41cm、深さ42.8~60.5cmをはかる。

遺物は炉体土器、住居北側の床面で石皿を検出したほか、多くは住居址覆土中から纏まって出土した。

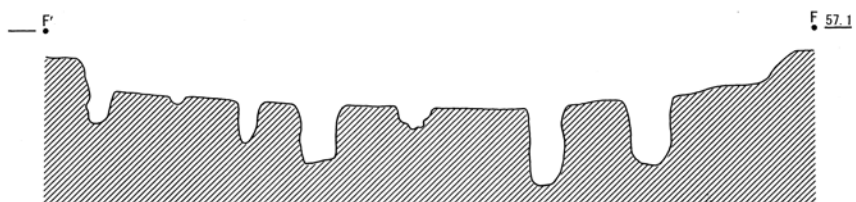
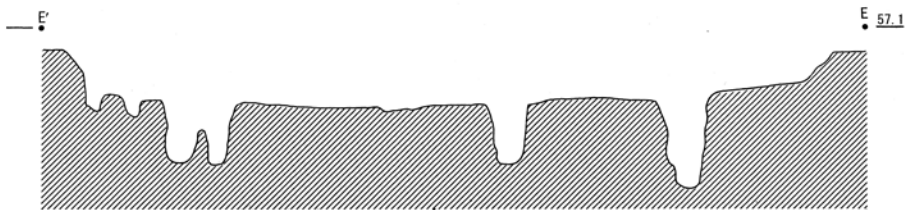
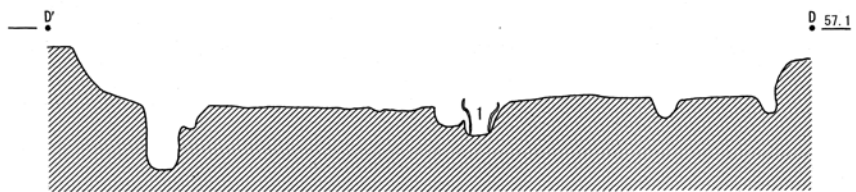
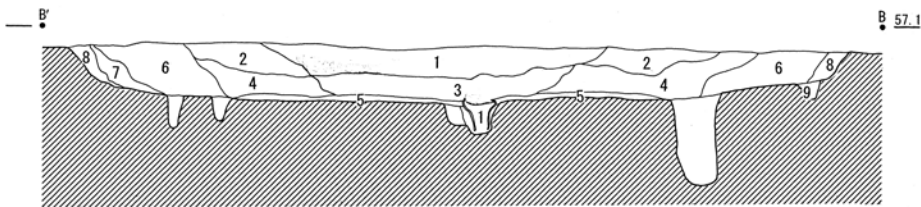
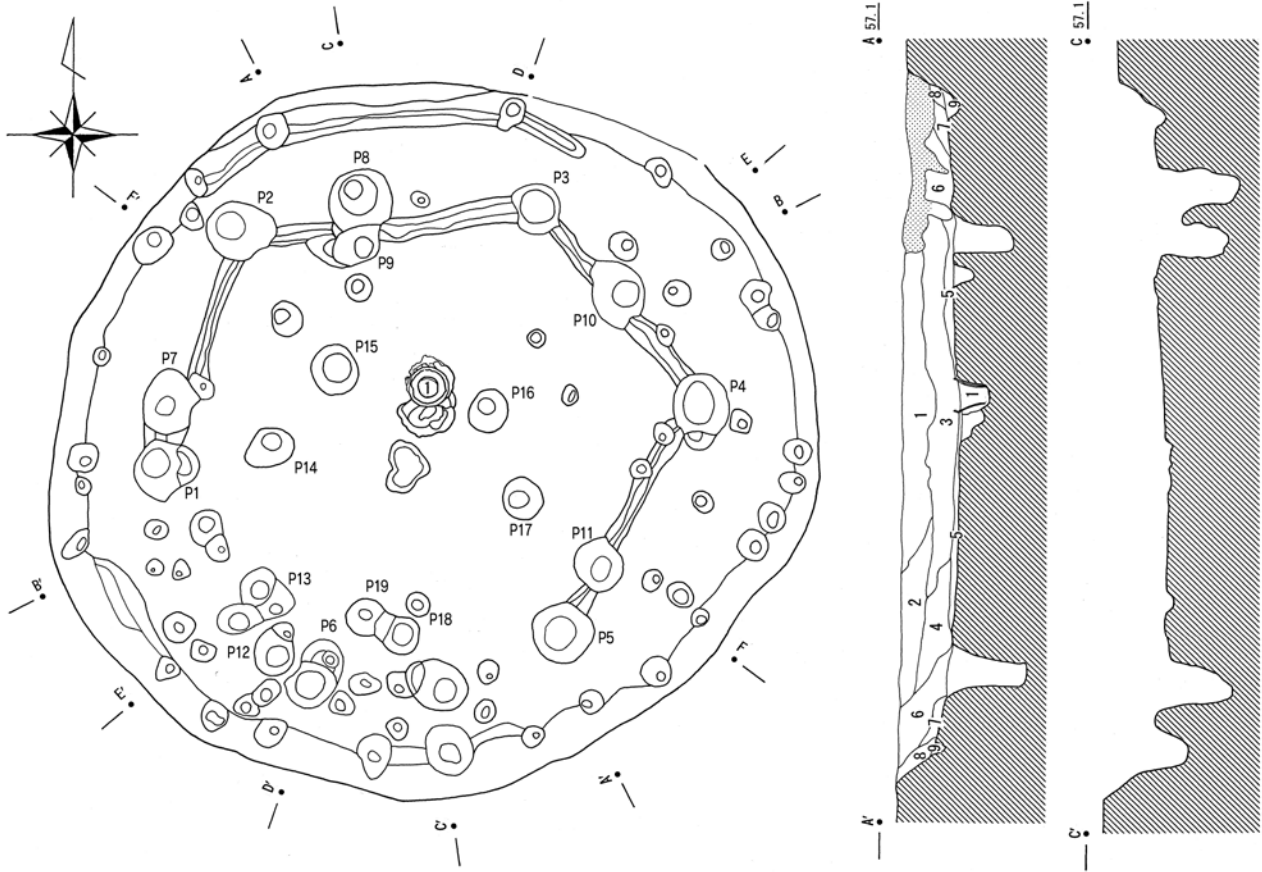
出土遺物

1は炉体土器、69は床面からの出土である。

縄文時代中期中葉土器（第25図1、2、第26図3、4、第27図5~8、第28図9~17、第29図18~29、第30図30~37・図版21-1~4、図版22-5~8、図版23-9~11、13、16~18、図版24-22~26、29、31、32）

1は炉体土器である。胴部下半は欠損している。内彎する口縁部は無文で、突起が欠損している。胴部は刻み目を持つ隆帯から垂下する2条の隆帯により文様を区画し、隆帯中位の円文から伸びる隆帯による逆「U」字状や、斜位に垂下する隆帯による渦巻文などが描かれている。区画内は隆帯に沿って1条の沈線が巡り、沈線内は集合沈線、三叉文や連続爪形文が施される。口径26cm、残存高21.4cmをはかる。

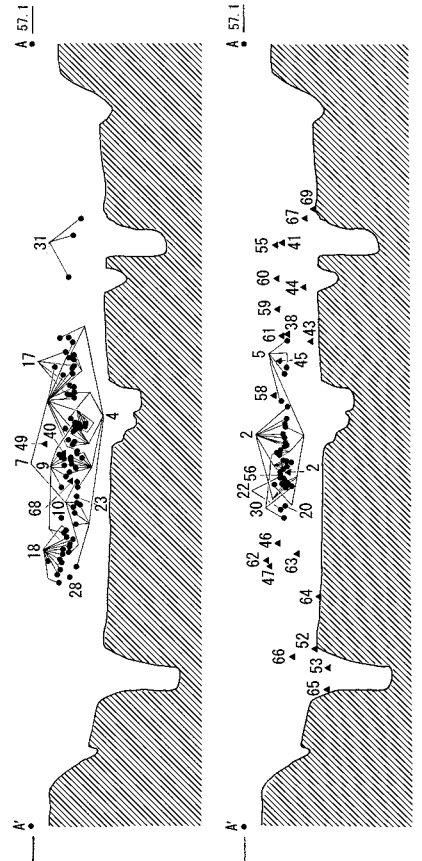
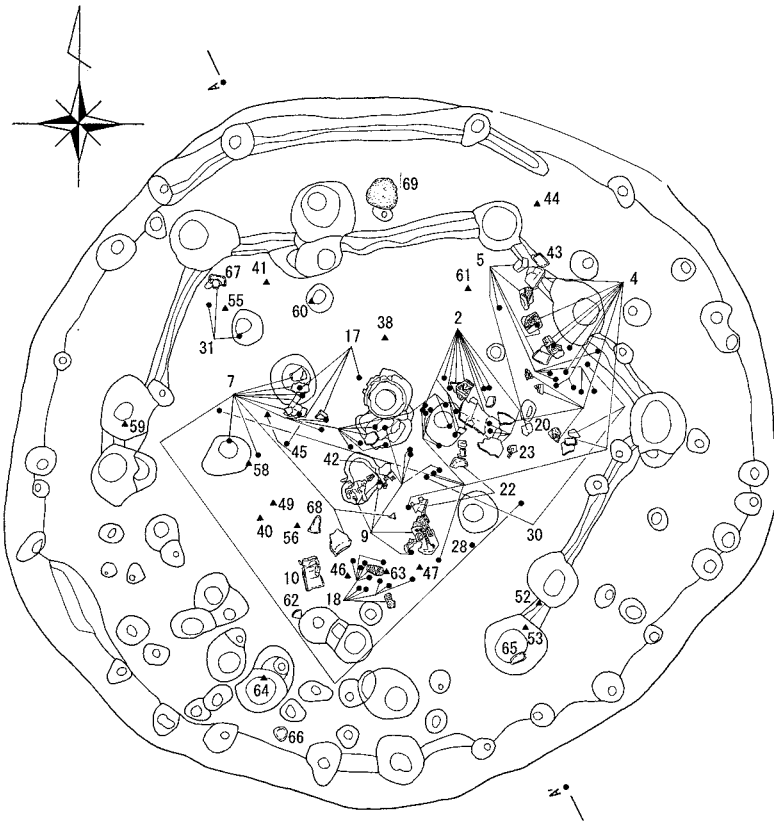
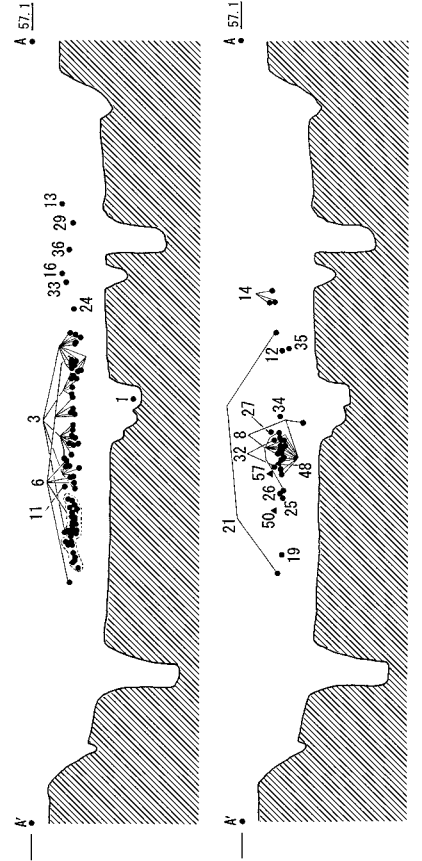
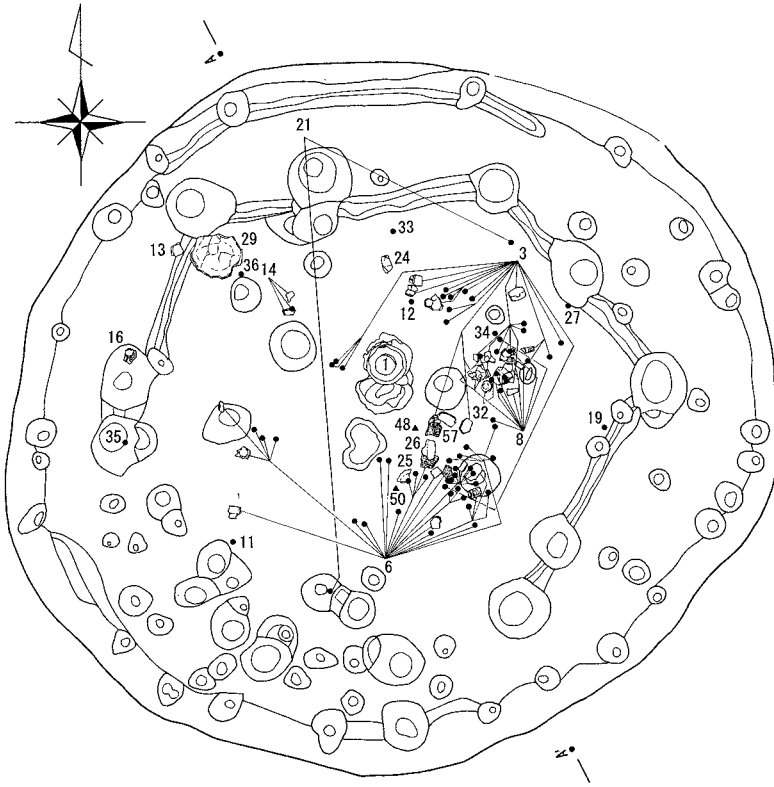
2は所謂出産土器で、樽形の胴部から大きく外反する無文の口縁部へ至る。口縁部内面は粘土紐により肥厚している。頸部には眼鏡状突起を前後に有する。口縁部から垂下する側面に刻み目を持つ隆帯は沈線による十字文が施される。胴部は眼鏡状突起から横走する綾杉状の刻み目を施し、一部交互刺突文となる隆帯と沈線により区画し、胴部下半は縄文が施される。眼鏡状突起下は側面に刻み目を施す扁平な隆帯による円文で、内部は沈線による交互刺突文が円に沿って施され、中心部は小突起となる。円文下端から左右に綾杉状の刻み目を持つ隆帯が弧状に立ち上がり、先端は三本指状となっている。反対面は眼鏡状突起から綾杉状の刻み目を持つ隆帯が垂下する。文様間は刻み目を持つ隆帯による横「S」字状文や波状文が横位展開する。隆帯区画間は沈線による三叉文や連続爪形文が施される。口径24.2cmをはかる。



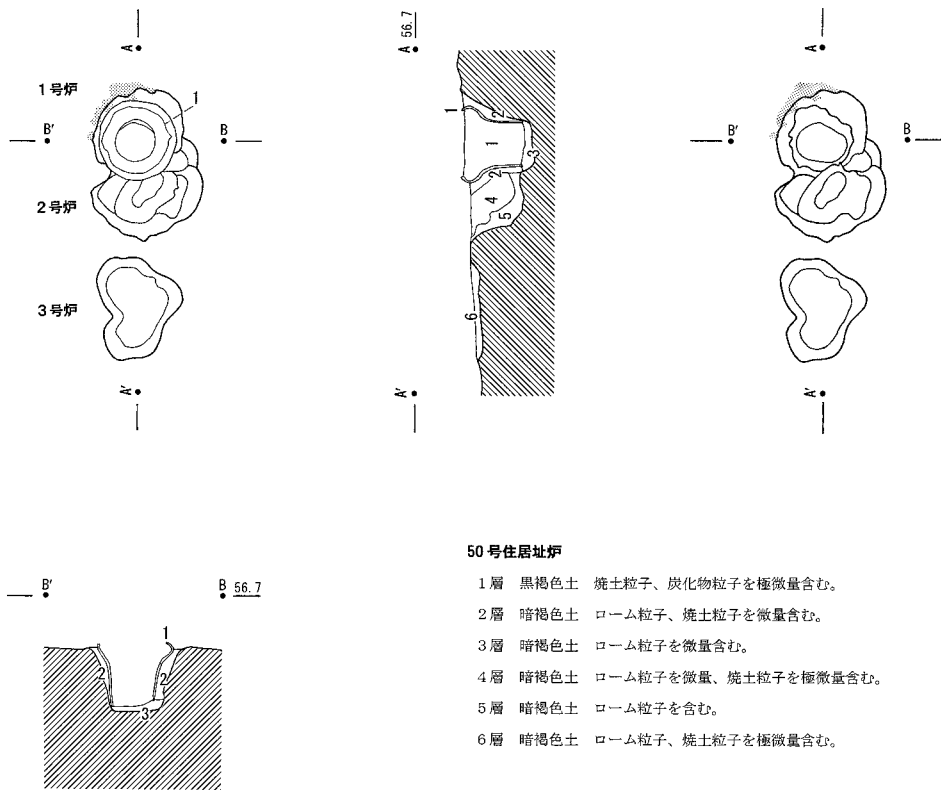
50号住居址土層

- 1層 黒褐色土 ローム粒子を極微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 3層 黒褐色土 ローム粒子、炭化物粒子を微量含む。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子、ローム小ブロックを少量含む。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子を微量、炭化物粒子を極微量含む。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子、ローム小ブロックを含む。
- 7層 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 8層 暗黄褐色土 ローム粒子を多量含む。
- 9層 暗黄褐色土 ローム粒子を含む。

第22図 50号住居址 (1/60)



第23图 50号住居址遺物出土狀況图 (1/60)



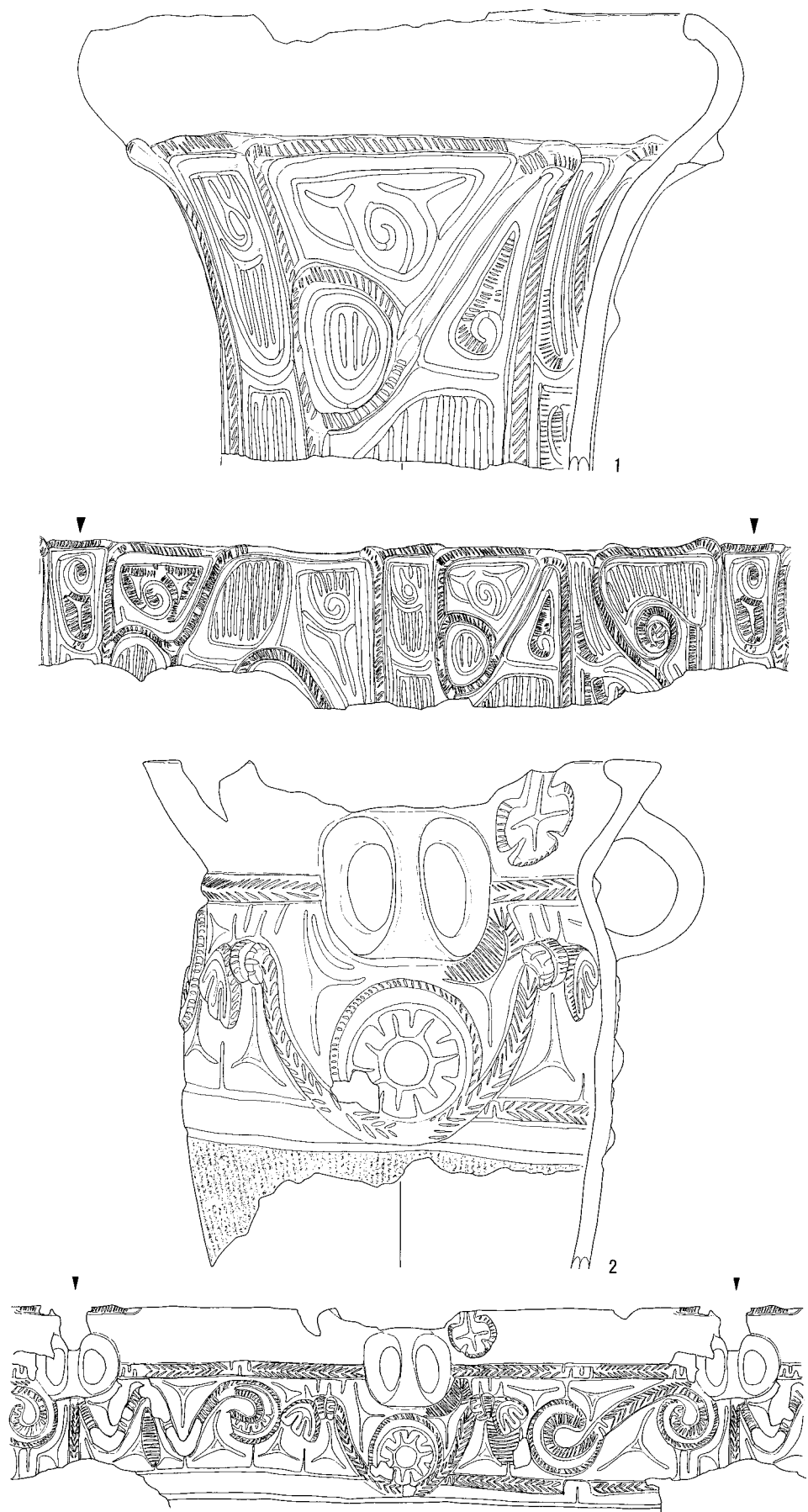
50号住居址 炉

- 1層 黒褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を極微量含む。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子を微量含む。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子を微量含む。
- 4層 暗褐色土 ローム粒子を微量、焼土粒子を極微量含む。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子を含む。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子を極微量含む。

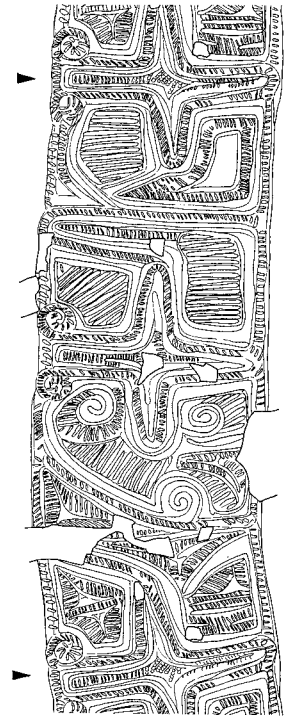
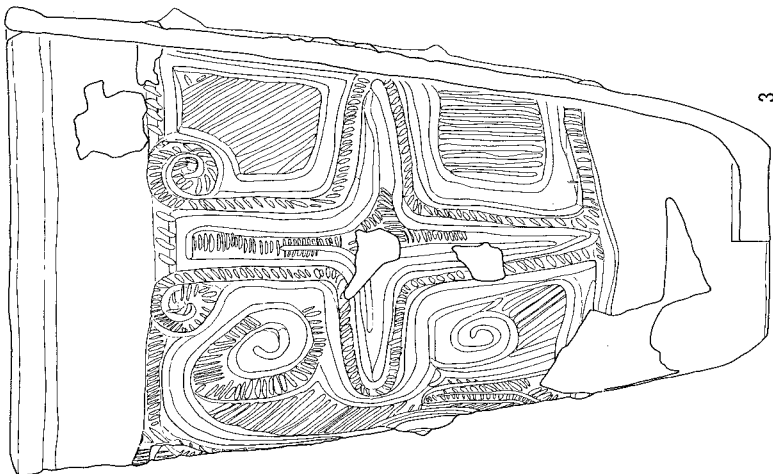
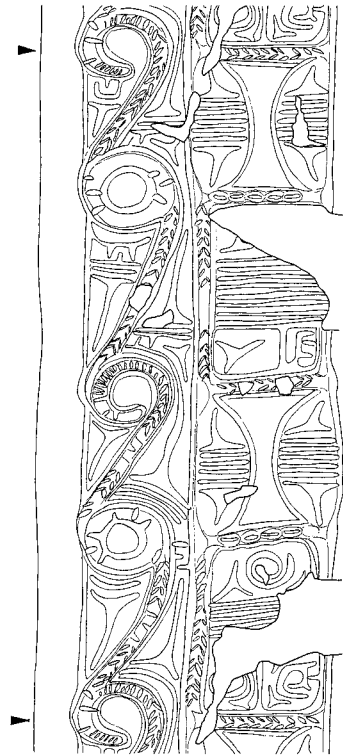
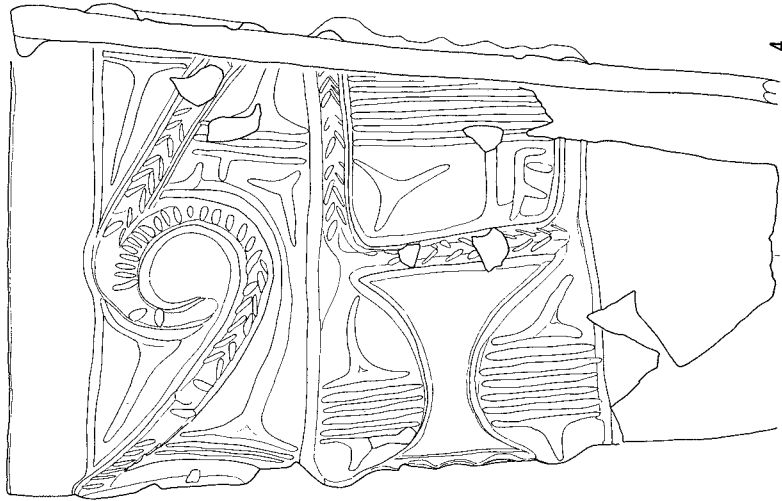
第24図 50号住居址 炉 (1/30)

3～5は口縁部に向かってやや開く円筒形を呈し、口縁部及び底部が無文で胴部に横位展開する文様帯を持つ土器である。3は刻み目を持つ隆帯による文様構成で、隆帯に沿って沈線が施される。胴部は横走る隆帯から端部が渦巻文の2条の隆帯が十文字状に垂下する。隆帯間は沈線、連続爪形文及び押引文が施される。この十文字状の文様が土器の前後に配されている。この文様間は垂下する1状の隆帯及び渦巻文を持つ隆帯が斜位に伸びている。隆帯による区画文内には沈線による区画文、渦巻文及び集合沈線が施される。口径18.6cm、底径7.5cm、器高30cmをはかる。4は口唇部内側が肥厚し平坦面を作出している。胴部は上下2段の文様帯で上段は綾杉状の刺突文や交互刺突を有する隆帯による4単位の円文や渦巻文が横位に展開する。区画内は沈線による三叉文が施される。下段は綾杉状の刺突文を施す隆帯や連鎖状隆帯が垂下し4単位の区画文を作出している。区画内は対向する幅広の半円状隆帯を上下に配し、集合沈線及び三叉文を施す区画と、沈線による三叉文や渦巻文及び集合沈線を施す区画を交互に配している。口径19.2cmをはかる。5は底部を欠損している。口唇部は隆帯により肥厚している。胴部は刻み目を持つ隆帯による円文から隆帯及び弧状隆帯が垂下し、垂下する隆帯の上下から伸びる隆帯が渦巻文へと展開している。区画内は集合沈線及び渦巻文が充填されている。

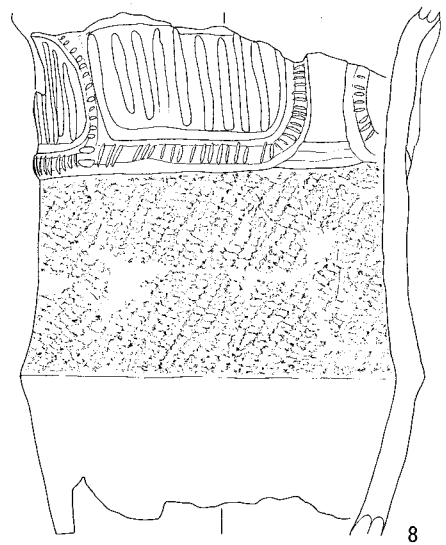
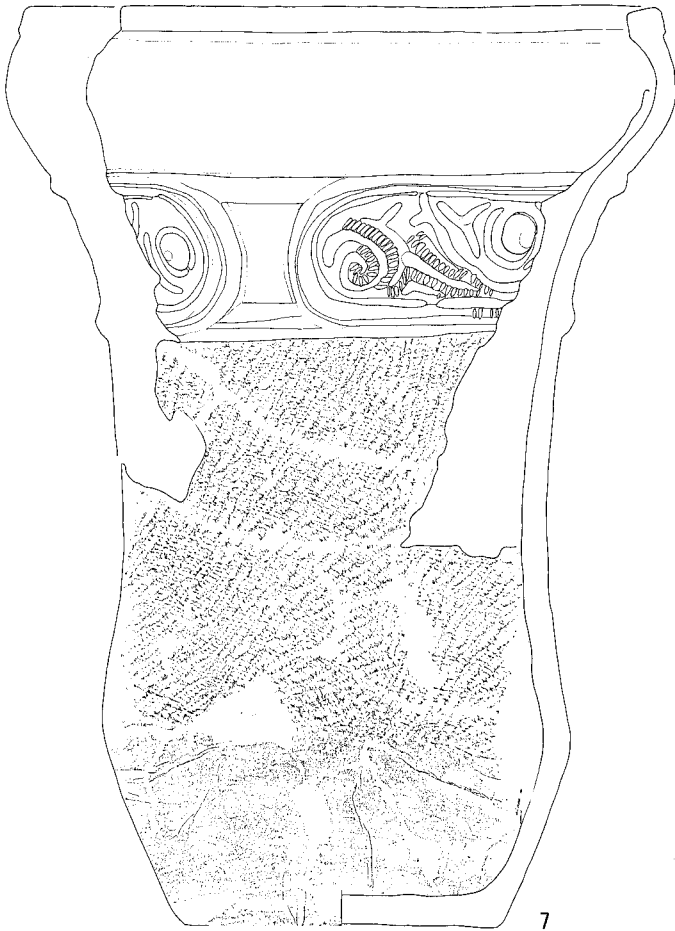
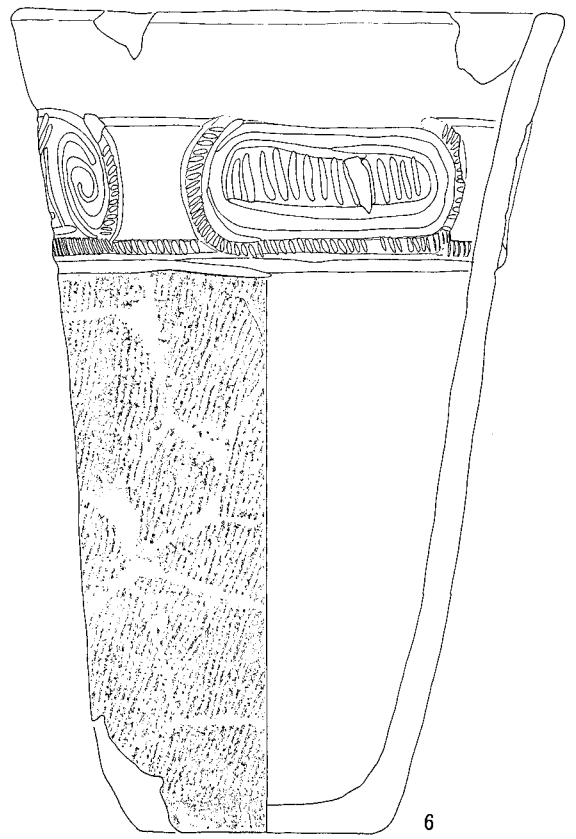
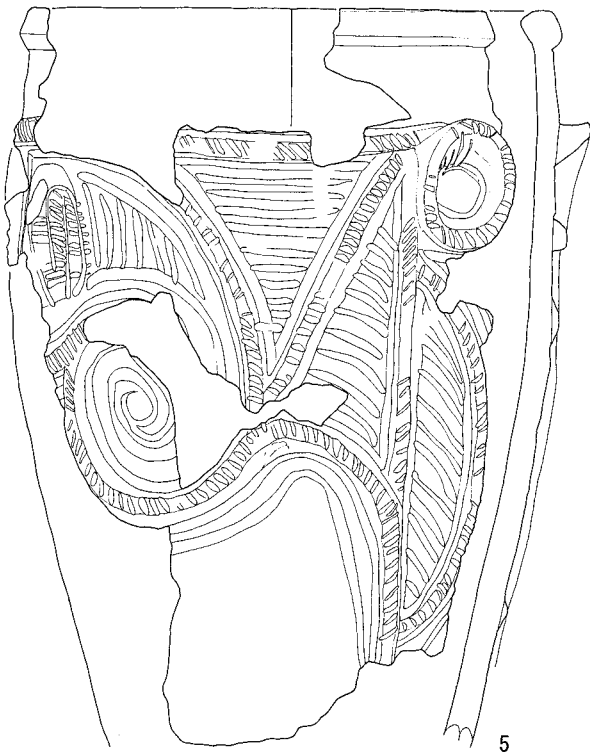
6～10は胴部に縄文を施す土器である。6～8は頸部に隆帯による楕円区画文を有し、6、8は隆帯上に刻み目を施している。6は外傾する胴部から直線的に口縁部へ至る器形で、楕円区画内は集合沈線及び渦巻文を施している。7、8は無文の屈曲底から胴部で窄まり、内彎する口縁部へと至る器形で、8は口縁部を欠損する。7の楕円区画内は沈線による渦巻文と小突起を有する渦巻文が横「S」字状に施される。口径25cm、底径12.2cm、器高36.6cmをはかる。8は楕円区画文が一部重複するように施文される箇所がある。区画内は集合沈線が充填されている。9、10はやや外傾しながら口縁部へ至る器形である。9は綾杉状の刻み目を施す口縁部突起から胴部文様帯へ隆帯が「J」字状に垂下し、文様帯下端の幅広の隆帯



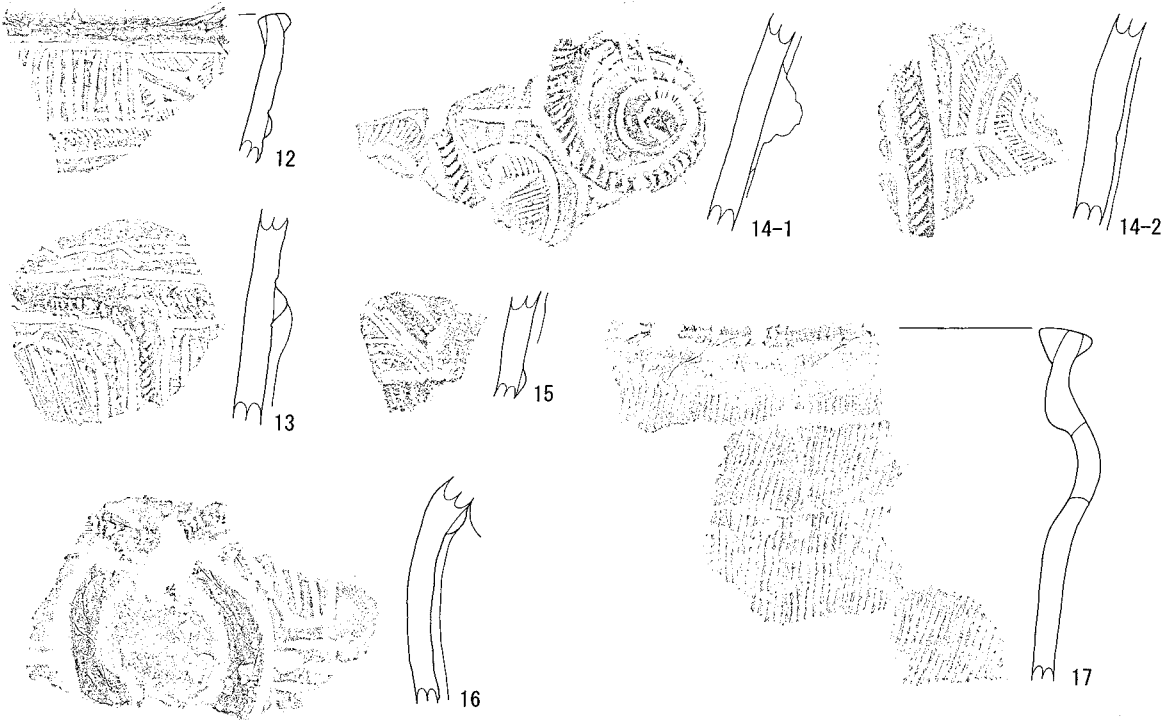
第25図 50号住居址出土遺物 (1) (1/3) 但し、展開図は (1/6)



第26図 50号住居址出土遺物 (2) (1/3) 但し、展開図は (1/6)



第27图 50号住居址出土遺物 (3) (1/3)



第28图 50号住居址出土遺物 (4) (1/3)

となる。区画内は沈線を上下から交互に施している。10は胴部文様带上端を沈線で区画する。刻み目を施す波状隆帯が横走し、波頂部は円文となる。波状隆帯によって出来た「U」字状の区画内は沈線、三叉文や連続刺突文、さらに沈線による三本指文を作出した円文を添付している。

11は強く内彎する口縁部で、突起を有すると思われるが欠損している。口縁部は垂下する2条の隆帯間を隆帯で結び円文としている。隆帯上及び隆帯脇に刻み目や交互刺突文及び三叉文を施している。隆帯に沿って沈線で区画し、交互刺突文、集合沈線で文様を作出している。12は口縁部が肥厚し、やや内傾する平坦面を作出している。刻み目を施す横走する隆帯により区画された口縁部文様帯は集合沈線間に三叉文が対向するよう配され、連続爪形文が施されている。

13～16は胴部破片で、13は刻み目を施す横走する隆帯から1条の隆帯が垂下する。隆帯脇は沈線となる。頸部は波状沈線が横走する。胴部は沈線による区画文を施した後、半截竹管による斜位の条線を施文している。14は刻み目を施す隆帯による垂下及び渦巻文などで文様を作出している。渦巻文の中心は粘土を瘤状に貼り付け、沈線による渦巻文を施す。隆帯による区画内には沈線や連続爪形文により三叉文や半円形文を描いている。15は隆帯が横走及び斜位に垂下する。横走する隆帯には刻み目を施す。垂下する隆帯に沿って1条の沈線が施される。胎土に金雲母を含んでいる。16は弱く内傾する胴部から大きく開く器形と思われる。刻み目を施す横走する隆帯から幅の広い隆帯が弧状に垂下し円文となる。円文の内側は無文であるが、外側は2条から3条の沈線が横走し、「U」字状の沈線の内部に集合沈線を施している。

17は地文に撚糸文、18～22は地文に縄文を施す土器である。17はやや外反しながら立ち上がり口縁部にあたる部分で内彎し、18は胴部上半で内彎し無文の頸部で外反する。胴部は縦位縄文を施文している。19はやや外傾しながら立ち上がり無文の頸部で大きく外反している。20は半截竹管文による3条の沈線が垂下し、沈線間を3条の沈線が斜位に垂下している。21は底部の破片である。胴部下端には縄文は施文されていない。推定底径9.3cmである。22は胴部下半が屈曲し胴部中位で窄まる器形である。胴部中位に縄文が施文される。底径10.4cmをはかる。23は口縁部突起で円形を呈する。内面は無文で円形の窪みを有する。円頂部の突起には沈線が垂下し、沈線間を綾杉状の刻み目が垂下している。外面は円頂部に渦巻文を施した突起から隆帯が垂下している。隆帯上には綾杉状の刻み目及び円文が施される。突起左側は隆帯及び沈線により十字文が作出され、先端部に刻み目が施される。右側は隆帯外縁に沿って三叉文及び交互刺突文が垂下し、区画内は集合沈線が垂下している。

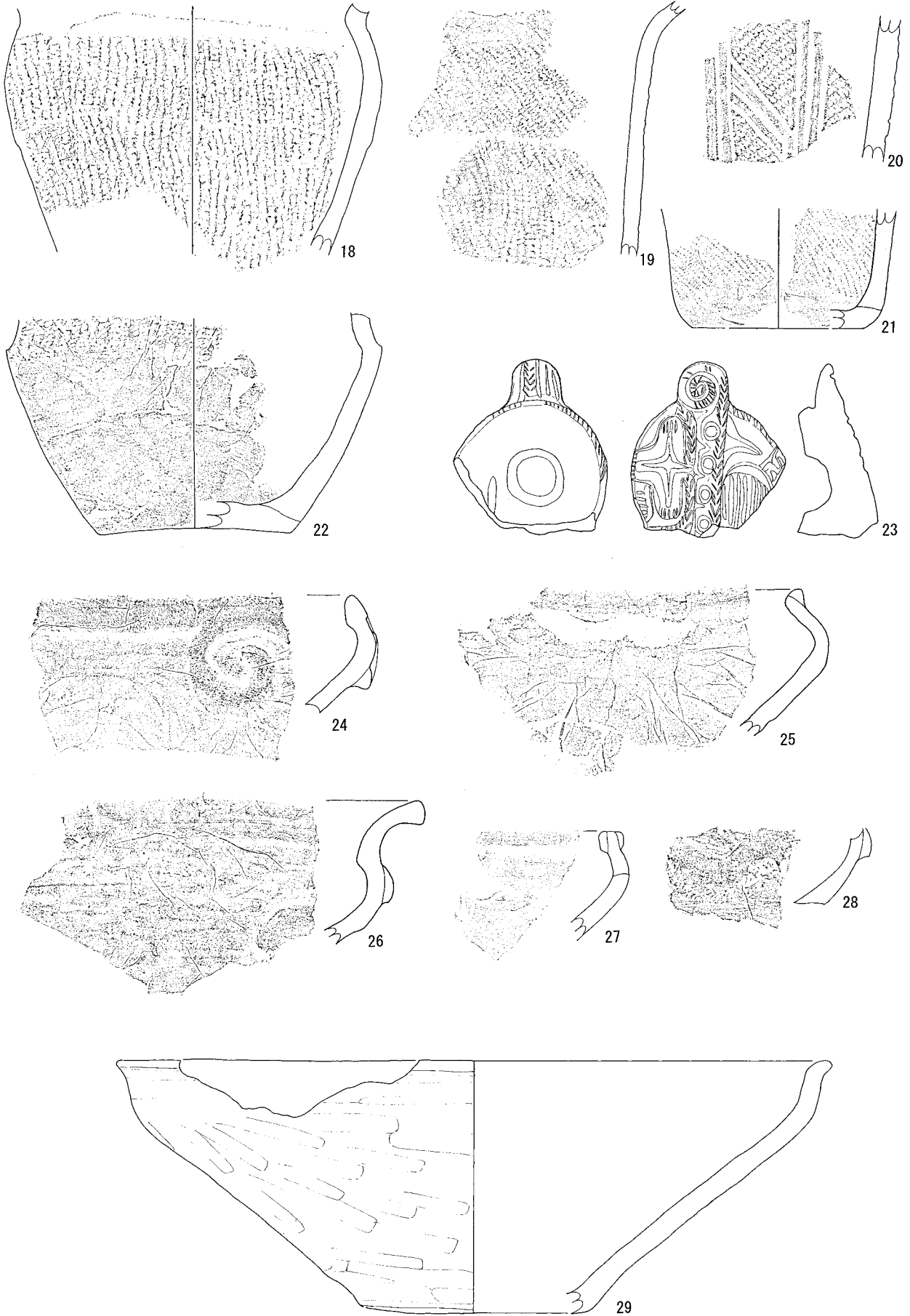
24～30は無文の浅鉢形土器である。24、25、27は体部から内彎する口縁部となる器形で、口唇部及び内面は粘土紐により肥厚している。24は隆帯による渦巻文を有する。25は器内外面に朱が認められる。26は体部から内彎し、頸部から大きく外反して口縁部に至る。肩部に扁平な隆帯が弧状に横走する。28は扁平な波状隆帯が横走する。隆帯に沿って連続爪形文が施される。29は口縁部で弱く内彎する器形である。口径38.5cm、器高13.6cm、推定底径12.4cmをはかる。30は肩部で強く屈曲している。

31～35は小形の土器である。31は胴部下半から底部で、2条の沈線が横走し、沈線により文様が描出されている。底径6.5cmをはかる。32は鉢形を呈する。口径6.5cm、底径5cm、器高3.1cmをはかる。

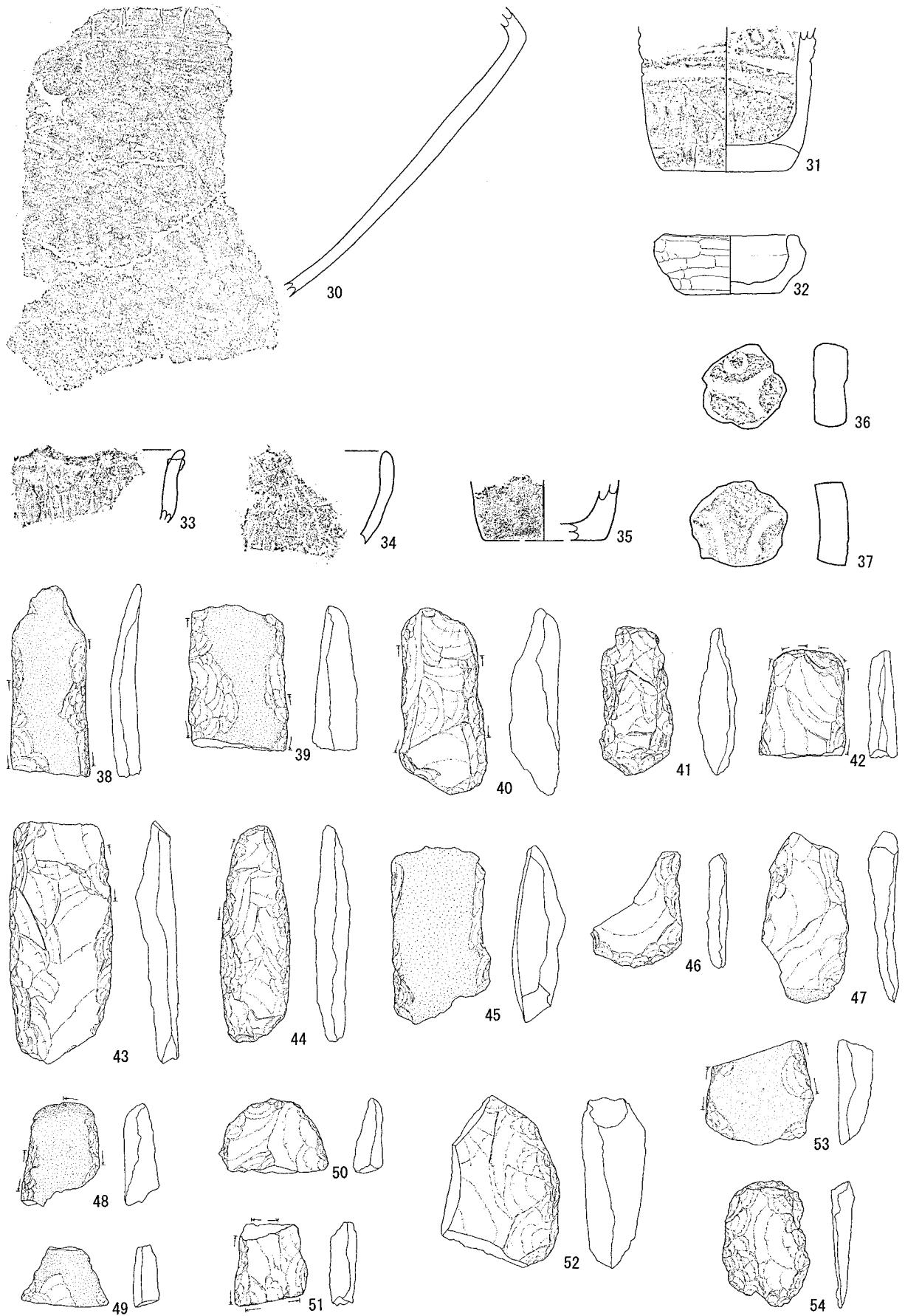
土製品

土製円盤（第30図36、37・図版24-36、37）

36、37は周辺部磨調整がみられる。36は沈線による円文が施される。37は地文縄文で、2条一対の沈線が弧状に垂下する。36は最大径2.9cm、重さ12.6g、37は最大径3.5cm、重さ14.6gをはかる。



第29图 50号住居址出土遺物 (5) (1/3)



第30図 50号住居址出土遺物 (6) (1/3) 但し、36、37は (1/2)

石器

打製石斧（第30図38～54、第31図55～59・図版25-38～47、52、54～59）

34～47は短冊形を呈する。38は刃部を、39は基部と刃部を欠損する。自然面を残し、両側縁に調整剥離を施している。両側縁に磨滅痕がみられる。40は厚みがあり刃部の一部を欠損している。裏面に自然面が残る。両側縁に磨滅痕が残る。41は左側面に磨滅痕が残る。42、43は刃部を欠損する。裏面は大きめな剥離により扁平となる。両側縁に磨滅痕が残るが、42は基部にまで及んでいる。43は長さ12.9cm、幅5.5cm、重さ156gをはかる。44は細身で、両側縁に調整剥離を施している。刃部は片側の磨滅が著しい。両側縁の一部に磨滅痕がみられる。長さ11.6cm、幅3.7cm、重さ98gをはかる。45は厚みがあり、刃部を欠損する。自然面残り、両側縁は調整剥離を施している。47は刃部の一部を欠損する。両側縁に調整剥離を施している。石質は38～40が砂岩、41～43が珪質頁岩、44～47はホルンフェルスである。

48～56は撥形を呈する。48～51は刃部を大きく欠損し、基部のみが残る。48、49は自然面を多く残し、両側縁に調整剥離を施している。48、51は両側縁に磨滅痕が残る、51は基部まで及んでいる。52は厚みがあり、基部及び刃部を欠損する。左側面は大きな剥離面を残し、右側面に調整剥離を施している。53は基部を、54、55は刃部を欠損している。53は自然面を多く残す。両側縁に調整剥離を施し、53は両側縁に、54は基部に、55は右側縁に磨滅痕が残る。56は厚みがあり、両側縁に調整剥離を施している。刃部は磨滅が顕著である。長さ10.1cm、幅5.5cm、重さ220gをはかる。石質は48、52、56がホルンフェルス、49、50、53、54が砂岩、51が珪質頁岩、55が黒色片岩である。

57は他の打製石斧より大形を呈し、扁平である。基部を欠損する。刃部の片側に磨滅が見られる。石質は緑色片岩である。58、59は分銅形を呈するが、基部を欠損する。59は自然面を多く残す。両側縁に弱い抉りを施し、磨滅痕が認められる。石質は58が珪質頁岩、59が砂岩である。

剥片石器（第31図60、61・図版25-60、61）

60、61は三角形を呈する。60は基部の一部を、61は刃部の一部を欠損する。刃部は細かい調整剥離を施している。61は長さ6.8cm、重さ102gをはかる。石質は共にホルンフェルスである。

敲石（第31図62～67・図版25-62～66、図版26-67）

62、63は基部、先端部を欠損する。62は扁平な面に磨痕が認められ、一部に敲打痕が残る。63は両面に磨痕が認められ、両側縁に敲打痕が残る。64も先端部が欠損している。扁平面に磨痕が認められ、基部及び側縁部に敲打痕が残る。65は基部及び先端部に敲打痕が、両側縁に敲打による磨滅痕が認められる。長さ13.5cm、幅6cm、重さ480.5gをはかる。66は裏面を欠損する。扁平な面に磨痕が認められ、一部に敲打痕が残る。67は先端部に敲打痕が残る、基部に敲打による磨滅痕が認められる。長さ12.4cm、幅6cm、重さ395gをはかる。

石質は62が緑色岩、63が石英閃緑岩、64、67が砂岩、65がチャート、66が細礫岩である。

スタンプ形石器（第31図68・図版26-68）

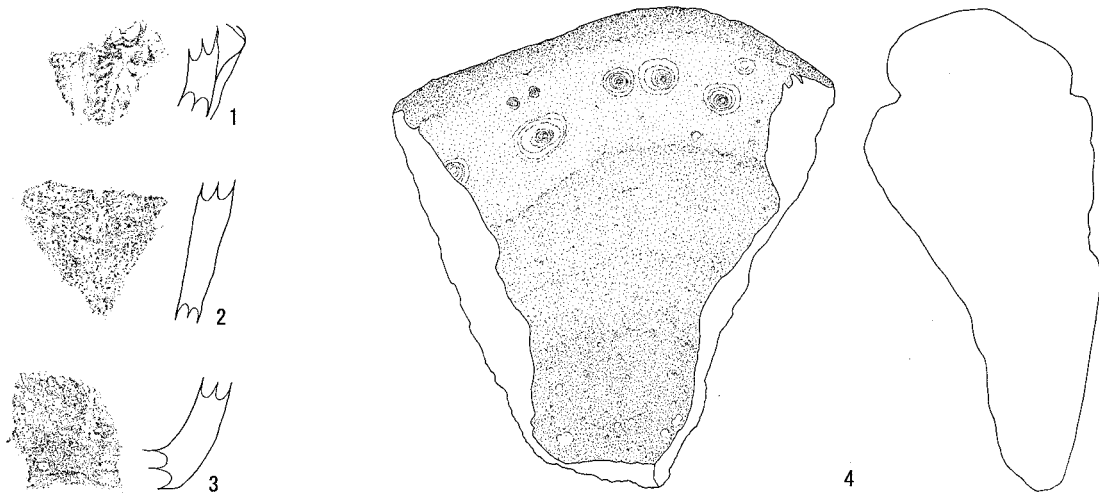
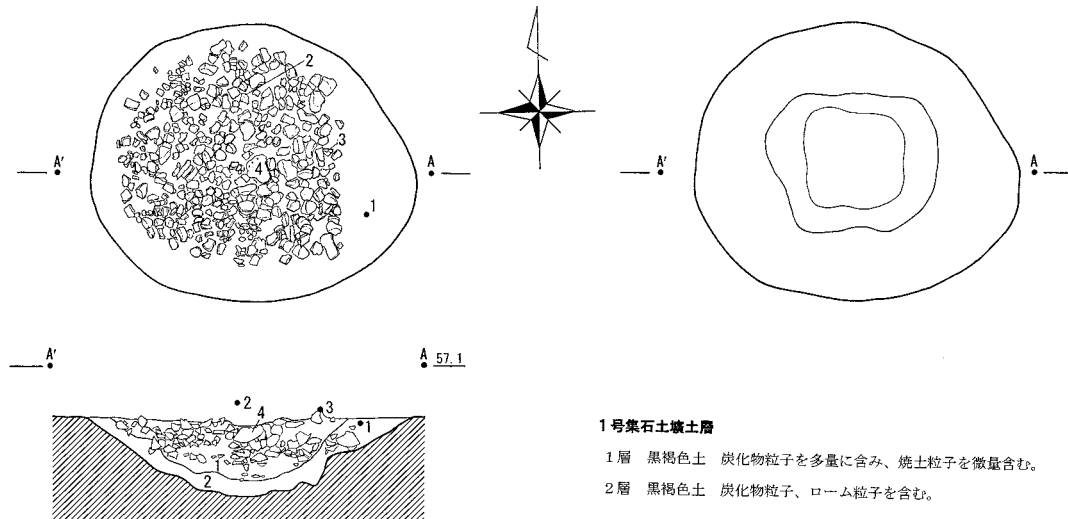
68は三角形を呈する。底面に磨痕が認められる。表面に点状の敲打痕の集中がみられ、底面端部、側縁に敲打痕が認められる。長さ13.5cm、幅8.8cm、重さ840gをはかる。石質は砂岩である。

石皿（第31図69・図版26-69）

69は楕円形を呈する。全体が弱く凹面側に反った器形となる。凹面に擦痕が認められる。表面及び裏面に窪みがみられる。長さ25.6cm、幅21.5cm、重さ4.5kgをはかる。石質は石英閃緑岩である。



第31图 50号住居址出土遺物 (7) (1/3)



第32図 1号集石土壌 (1/60)、出土遺物 (1/3)

5：1号集石土壌

本集石土壌は調査区の南側、50号住居址の南東側で検出した。平面プランは円形を呈し、径1.7m、深さ40cm、底面は径50cmをはかる。壁は緩やかな傾斜を持って立ち上がる。礫は1層に集中し、2層からは炭化材の小片が出土した。礫数は丸礫104個、角礫2,580個である。遺物は集石上層から出土した。

出土遺物

縄文時代中期中葉土器 (第32図1～3・図版26-1～3)

1、2は胴部破片で、刻み目を持つ隆帯が横走及び垂下している。2は地文に条線を施している。3は無文の胴部下半から底部の破片である。

石器

石皿 (第32図4・図版26-4)

4は石皿片で、深い凹面には擦痕が認められる。底面は平坦に整形されている。表面の縁及び裏面に窪みが見られる。石質は安山岩である。

第5章 まとめ

1：遺構の時期について

今回の調査では、縄文時代中期中葉の住居址を調査区の中央部で3軒検出した。宿東遺跡の北西端にあたり、調査区西側では遺構が検出されなかった。48号住居址、50号住居址は炉体土器が検出されたが、49号住居址は石囲炉で、炉体土器は検出されなかった。遺物の出土状況は、49、50号住居址では覆土中に纏まって土器が出土するいわゆる「吹上パターン」の様相を示していた。ここでは出土遺物から各遺構の時期について検討してみたい。土器変遷については谷井彪氏他(1982)、黒尾和久氏(1995)、中山信治氏(2016)を参考とした。

宿東1期（勝坂2式、藤内式段階）

隆帯側面を連続爪形文で抑え、連続爪形文に沿って三角押文及び波状沈線を施す段階である。三角押文と波状沈線で2段階とする場合もある。

1a期（勝坂2a期、埼玉編年Ⅵ期、地平編年7期段階）

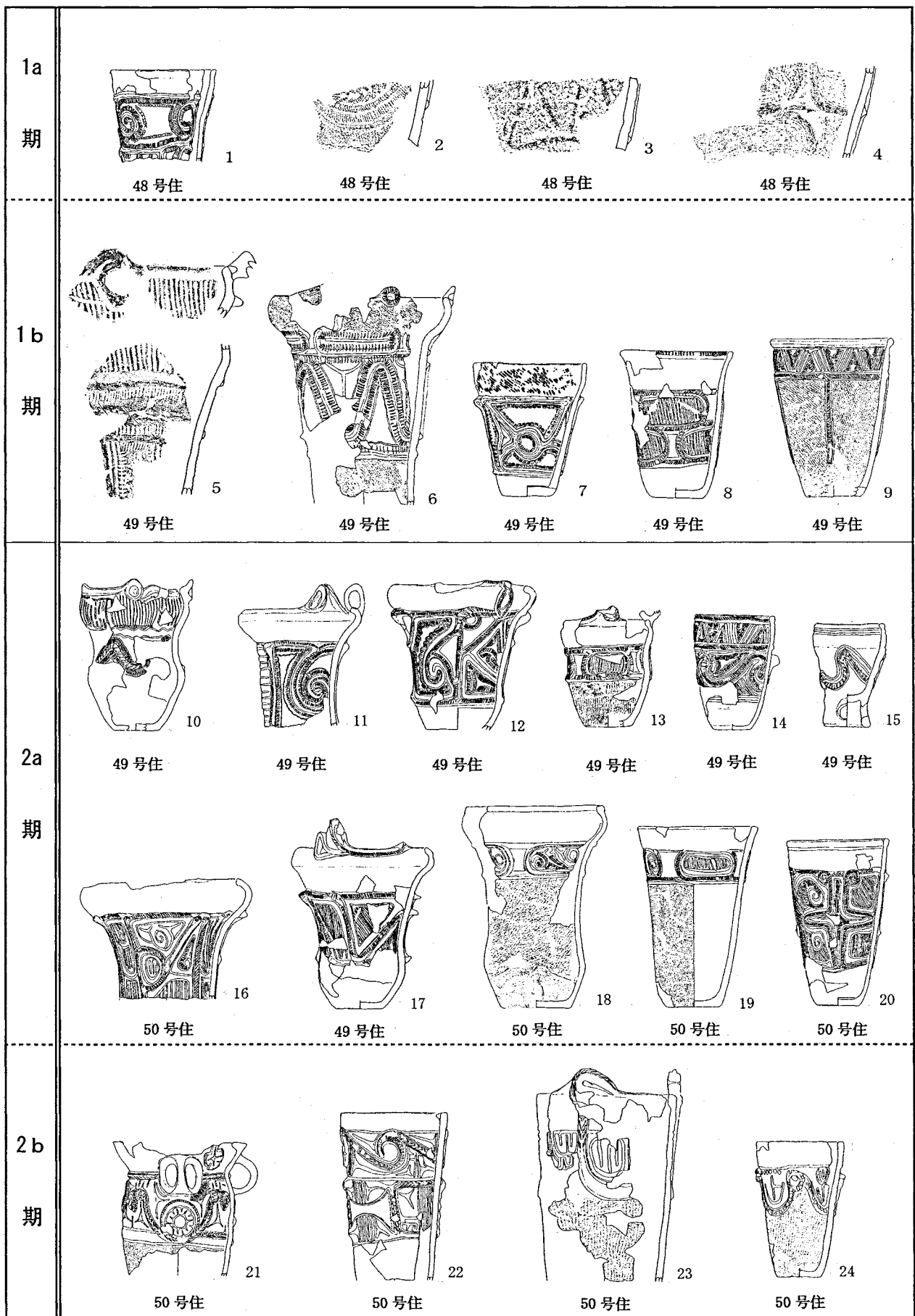
48号住居址炉体土器（1）、48号住居址覆土中から出土している（2）、（3）が該当する。1はやや外傾しながら立ち上がる円筒形を呈し、無文の口縁を有し、胴部は横走する隆帯により2段の文様帯を区画している。上段は上下それぞれの隆帯から渦巻文が展開し、隆帯側面に沿って連続爪形文及び三角押文を施している。連続爪形文が一部角押文となっている箇所があり、勝坂2a期でも古段階に該当すると思われる。2は地文に縄文を施し、連続爪形文を施した1条の隆帯が弧状に区画し、隆帯に沿って連続爪形文及び三角押文、さらに波状沈線が施されている。区画内は三角押文を綾杉状に施文している。3は1条の隆帯による三角形区画を作出し、隆帯に沿って押引文を施している。この他48号住居址覆土からは胎土に金雲母を含む阿玉台式土器（4）が出土している。山形の隆帯による区画文が横走及び垂下し、区画内は隆帯に沿って2条一対の沈線が施され、沈線の一部は押引文となっている。阿玉台Ⅱ式と思われる。

1b期（勝坂2b期、埼玉編年Ⅶ期、地平編年8期段階）

隆帯上及び隆帯脇を半截竹管で沈線状に押さえる個体が出現する段階である。49号住居址覆土中から出土した土器群が該当する。49号住居址覆土中からは多くの土器が纏まって出土している。この中の一群が当該期であり、次の3a期に分類できる個体も存在している。

器形及び文様帯は（5）、（6）は頸部で外反し、内彎する口縁部を持つ器形で、胴部に隆帯による文様が展開する土器、直線的に立ち上がる（7）～（9）も胴部に文様展開する。胴部縄文を施すもの、2段の楕円区画文を施すものもある。

5は口縁部から胴部の破片で、口縁部は半截竹管による集合沈線を垂下させ、上下を撫で調整している。2条の連続爪形文を伴う隆帯により区画された頸部は波状沈線が横走する。胴部は隆帯脇に半截竹管による沈線を垂下させ、連続爪形文及び波状文を施している。6は口縁部と胴部下半に縄文が施される。頸部には楕円区画文を有し、胴部は波状隆帯が横走する。無調整の隆帯に沿って連続爪形文と波状沈線が施され、一部区画内に三叉文が施される。7の口縁部縄文は横走する胴部隆帯を貼り付けた後施文している。胴部文様帯は2条の垂下する隆帯による長方形区画と区画中央の円文から斜位に伸びる隆帯による文様構成となる区画からなる。隆帯に沿って半截竹管による沈線文、連続爪形文及び半截竹管先端による連続刺突文が施される。8は口縁部でやや外反する器形で、胴部は刻み目を持つ隆帯による楕円区画文が半単位



第33図 土器変遷図 (実測図は1/10、拓本は1/6)

ずらして2段施文される。区画内は半截竹管による集合沈線を施した後、隆帯脇を棒状工具により撫で整形している。9は口縁部に半截竹管による鋸歯文が横走し、区画内には連続爪形文、半截竹管による連続刺突文が施される。胴部は隆帯が4単位垂下している。胴部文様は7のように人体文系の複雑に文様を描出するもの、6のように隆帯が鋸歯状に横走し、三角形区画を作出するやや簡素化したものもある。前後関係か系統の相違かは判断が難しいところである。

宿東2期（勝坂3式、井戸尻式段階）

隆帯脇を沈線で押さえる段階と、隆帯が扁平化し、いわゆる半肉彫り手法となる段階の2段階となる。49号住居址覆土中の土器群の一部、50号住居址炉体土器及び覆土中層から纏まって出土した土器が該当する。50号住居址覆土中の土器群は文様から2段階に分かれる。

2a期（勝坂3a期、埼玉編年Ⅷ期、地平編年9a期段階）

49号住居址覆土中層から出土した土器群の一部、50号住居址が該当する。器形及び文様帯は、口縁部に文様帯を持ちキャリパー形を呈する(10)のほか、無文の口縁をもつ一群が主体を占める。内彎する口縁(11)～(13)、(16)～(18)に、胴部に文様帯を持つものと楕円区画文が横走するものがあり、(17)、(18)はキャリパー形を呈している。(19)、(20)はやや外反する円筒形を呈する。区画内に施文する沈線は(11)の半截竹管から、(13)、(19)のやや幅の広い沈線と変化する。

49号住居址10は口縁部に文様帯を持ち、キャリパー形を呈する。口縁部は細沈線や三角押文が垂下する。頸部は2条の波状沈線が横走し、一部連続爪形文を伴っている。胴部は刻み目を持つ波状隆帯が横走し、隆帯に沿って、連続爪形文及び三角押文が施される。三角押文を施すが、頸部に波状沈線が施されておりこの段階とした。11、12は刻み目を持つ1条の隆帯により文様描出され、隆帯脇は沈線状に撫で整形される。隆帯に沿って連続爪形文及び波状沈線が施される。12は半截竹管による連続刺突文、三叉文が施される。13は楕円区画文が4単位描かれ、区画内には集合沈線が充填されるが、1単位のみ連続爪形文及び波状沈線が施されている。胴部下半の縦位縄文は隆帯添付後に施文されている。14は前段階の9と同様な口縁部文様を持つが、鋸歯状文は沈線となる。胴部には刻み目を持つ波状隆帯が小文字「R」字状に横走する。隆帯によって出来た区画内は沈線、連続爪形文、半截竹管による連続刺突文及び交互刺突文や集合沈線が施されている。

16は50号住居址炉体土器である。11、12と同様に無文の口縁で、胴部に刻み目を持つ隆帯により文様描出されるが、隆帯に沿って連続爪形文は施されず、沈線によって文様区画され、区画内も三叉文が沈線化するなど、49号住居址覆土中の同段階土器群よりも新しいと思われる。49号住居址覆土中の17は刻み目を持つ隆帯の屈曲部が肥厚するなどこの段階の他の土器と同じ特徴を有するが、隆帯脇は沈線となり、区画内は半截竹管による集合沈線が施される。施文順位は隆帯→隆帯脇沈線→隆帯上の連続爪形文→区画内沈線→集合沈線となる。18～20も無文の口縁で、18、19の楕円区画文内は沈線による三叉文、やや太めの集合沈線となる。胴部は縄文が施される。

2b期（勝坂3b期、埼玉編年Ⅷ期、地平編年9b期段階）

50号住居址覆土中から纏まって出土した土器のうち、(21)～(24)が該当すると思われる。無文の口縁で円筒形が多く、文様描出する隆帯は扁平化がみられ、隆帯上に綾杉文が施される。三叉文も彫刻的になり、集合沈線も太くなるなどの特徴がみられる。

21はいわゆる「出産土器」である。樽形の胴部から大きく外反する無文の口縁部へ至る器形で、胴部上

半に文様帯を持ち、下半は縄文となる。頸部には眼鏡状突起を前後に有する。胴部の円文下端から左右に伸びる隆帯の先端は三本指状となっている。22は綾杉状の刺突文や交互刺突を有する隆帯による4単位の円文や渦巻文が横位に展開する。下段は連鎖状隆帯が垂下し、半肉彫り状の対向弧文及び集合沈線、三叉文を施している。23、24の胴部文様幅は狭くなり、文様帯下端の区画文が省略され、地文に縦位縄文が施される。隆帯は扁平化が進み、24では、沈線による三本指文を作出した円文を貼り付けている。区画内の沈線や三叉文が簡素になっている点も当段階を示す特徴である。

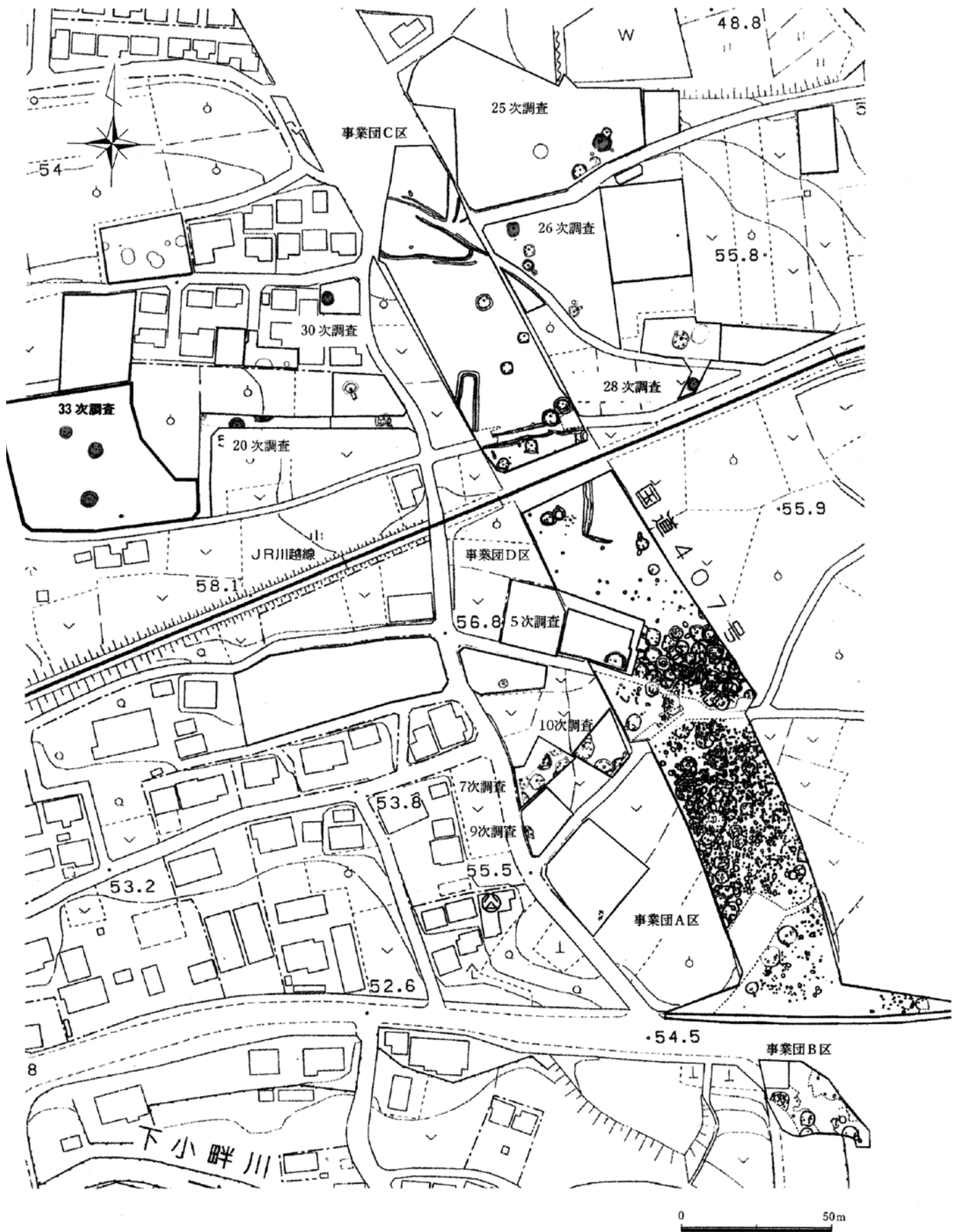
以上今回の調査で検出した3軒の住居址について出土土器から時期を検討し、勝坂Ⅱ期（藤内Ⅰ式）から勝坂Ⅲ期（井戸尻式）と位置付けを行った。49号、50号住居址からは多量の土器が集中して出土したが、土器群は2段階ほどの時間差があるように見られた。今後他の遺跡の出土例を参考に宿東遺跡の変遷について検討していく必要がある。

2：遺構の分布について

宿東遺跡は標高約55mの入間台地上に位置する。遺跡の南北には高麗丘陵を源とする小畔川及び下小畔川が東流し、東方1.2km下流で合流している。遺跡は両河川に挟まれた東西に長い台地上の南北200mの平坦面に広がる市内最大の集落遺跡で、これまでに縄文時代中期中葉から後期初頭までの住居址210軒以上などを検出している。

昭和56年に日高町教育委員会により第1次調査が実施されて以来、平成30年度までに22回の調査を実施し、縄文時代中期中葉から後期初頭の住居址51軒（盛土保存対応も含む）を検出した。平成6年～7年度には国道407号バイパス建設に伴う埼玉県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が実施された。この調査は遺跡の中心部を南北に縦断した結果となり、竪穴住居址160軒、掘立柱建物跡5棟、埋甕8基、土壇239基など多数の遺構が検出された（第34図）。宿東遺跡の調査範囲はA～D区に分かれている。A区、D区は県道川越日高線とJR川越線に挟まれた台地中央部、B区は県道川越日高線南側、下小畔川への傾斜面の始まる台地縁辺部、C区はJR川越線の北側、小畔川への傾斜面を含んでいる。A区では加曾利EⅠ式から称名寺式段階の住居址89軒、住居状遺構1軒、D区では加曾利EⅡ（新）からEⅢ段階に限定される住居址62軒を検出した。調査範囲で最も遺構密度の濃い調査区であり、時期も加曾利EⅠ式新段階から称名寺式段階である。これに対し、B区では加曾利EⅠ式新段階（2期）住居址1軒、C区では加曾利EⅠ期に属するもの6軒、EⅢ期に属するもの1軒であり、他調査区に比べ古い様相を呈している。遺跡の中心時期ともいえる加曾利EⅡ期からEⅢ期は激しく重複しているA、D区に集中しているのに対し、古相を呈する加曾利EⅠ式段階は台地縁辺部から検出されている状況で、特にEⅠ期古段階は調査範囲北側C区からのみ検出されている。検出された住居址の時期はすべて縄文中期後半、加曾利E式古段階からであり、勝坂式は破片資料のみの出土であった。遺跡の中央を横断するJR川越線の南側、事業団調査区の南半分と日高市で調査を実施した5次、7次、9次、10次調査区にかけてが、加曾利E式期集落の中心部と言える。

今回の調査では勝坂期の住居址の調査を実施したが、調査区は遺跡の北西端であり、加曾利E期の住居址群とは離れた箇所となる。事業団調査区では加曾利EⅠ期の住居址は、調査区の南側及び北側となり、加曾利EⅡ期以降に住居址が集中する部分では検出されていない。現在資料整理中の調査も含めた日高市による調査で検出した勝坂期の住居址は遺跡北西側の20次調査で3軒検出されている。加曾利EⅠ期でも、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が検出した時期より古い段階の土器が出土している住居址を含めると、遺跡



第34図 宿東遺跡遺構分布図

北側の25次調査で1軒、26次調査で1軒、28次調査で1軒、30次調査で1軒の4軒となり、計7軒が検出されている。分布は疎らではあるが、勝坂期から加曽利E I期古段階の住居址はJ R川越線の北側からの検出が多い傾向が認められる。

加曽利E期の住居址の集中域（環状集落）と勝坂期の住居址の分布域が異なる例は嵐山町行司免遺跡をはじめ多く確認されており、宿東遺跡でも同様な傾向となる可能性が高いと考えられる。

〈参考文献〉

- 谷井 彪他 1982 「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 並木 隆他 1984 「椿峰遺跡群」 所沢市文化財調査報告書第12集
- 安孫子昭二 1988 「勝坂式土器様式」『縄文土器大観2』 小学館
- 植木 弘 1988 「行司免遺跡」 埼玉県比企郡嵐山町遺跡調査会報告 4
- 井口尚司他 1997 「六仙遺跡Ⅱ」 東久留米市教育委員会
- 黒尾和久 1995 「縄文中期集落遺跡の基礎的検討（Ⅰ）－時間軸の設定とその考え方について－」
『論集宇津木台』第1集 宇津木台地区考古学研究会
- 渡辺清志他 1998 「宿東遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第197集
- 縄文時代文化研究プロジェクトチーム 1999 「神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅴ－中期中葉期 勝坂式土器文化期の様相その2 土器編年試案－」 神奈川考古同人会
- 新藤 健他 2003 「第二椿峰遺跡群」 埼玉県所沢市埋蔵文化財調査報告書第31集
- 石塚 和則 2003 「丸山遺跡」 埼玉県狭山市遺跡調査会報告書第13集
- 鍋島 直久 2009 「市内遺跡群4」 ふじみ野市埋蔵文化財調査報告第5集
- 今福 利恵 2011 「縄文土器の文様生成構造の研究」 未完成考古学叢書 8
- 安孫子昭二 2011 「縄文時代中期集落の景観」 未完成考古学叢書 9
- 上野真由美他 2012 「新田東遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査報告書第390集
- 中山信治他 2016 「縄文研究の地平2016－新地平編年の再構築－」 縄文研究の地平グループ、セツルメント研究会
- 石塚和則他 2017 「稻荷上遺跡 第6次調査」 埼玉県狭山市遺跡調査会報告書第26集
- 鎌田 翔他 2019 「市内遺跡群23」 ふじみ野市埋蔵文化財調査報告第24集



33次調査区遠景（48、49号住居址）



33次調査区遠景（50号住居址、1号集石土壙）

图版2



48号住居址



48号住居址 炉



48号住居址 炉完掘



49号住居址
遺物出土狀況 (1)



49号住居址
遺物出土狀況 (2)



49号住居址
遺物出土狀況 (3)

图版4



49号住居址
遺物出土状況（4）



49号住居址
遺物出土状況（5）



49号住居址（1）



49号住居址 (2)



49号住居址 炉



49号住居址 炉完掘

図版6



50号住居址
遺物出土状況（1）



50号住居址
遺物出土状況（2）



50号住居址
遺物出土状況（3）



50号住居址
遺物出土状況（4）



50号住居址
遺物出土状況（5）



50号住居址
遺物出土状況（6）

图版8



50号住居址
遺物出土状況（7）



50号住居址（1）



50号住居址（2）



50号住居址 1号炉



50号住居址
1号、2号炉完掘



50号住居址 3号炉

图版10



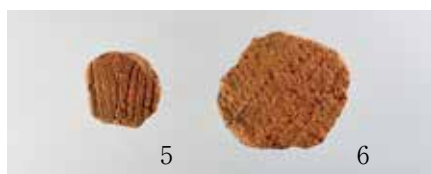
1号集石土壟



1号集石土壟
半截状况



1号集石土壟 完掘

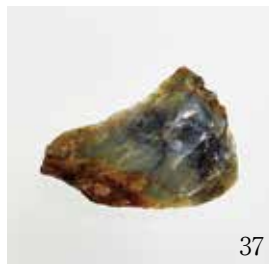


遺構外出土遺物



48号住居址出土遺物 (1)

图版12



48号住居址出土遺物 (2)



49号住居址出土遺物 (1)



49号住居址出土遺物 (2)



49号住居址出土遺物 (3)

图版16



49号住居址出土遺物 (4)



27



29



30



31



32



35



37



38



47



48

图版18



49号住居址出土遺物 (6)

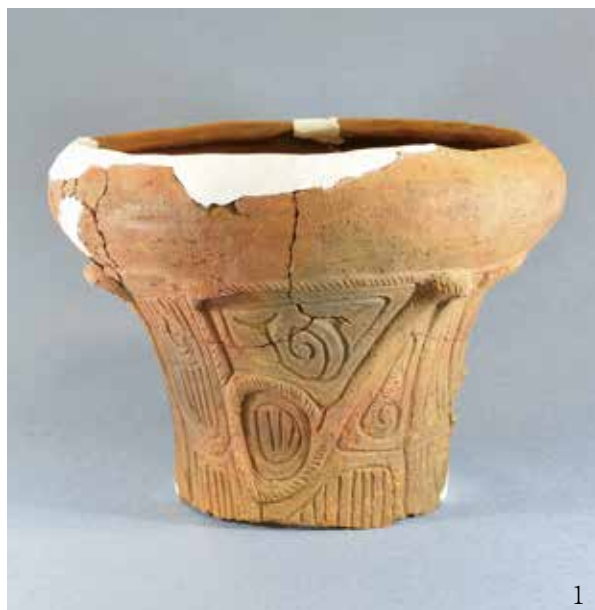


49号住居址出土遺物 (7)

图版20



49号住居址出土遺物 (8)



50号住居址出土遺物 (1)



50号住居址出土遺物 (2)



50号住居址出土遺物 (3)

图版24



50号住居址出土遺物 (4)



50号住居址出土遺物 (5)



50号住居址出土遺物 (6)



1号集石土壙出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しゆくひがし							
書名	宿東-33次調査-							
副書名								
巻次								
シリーズ名	日高市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第41集							
編著者名	松本尚也							
編集機関	日高市遺跡調査会							
所在地	〒350-1292 埼玉県日高市大字南平沢1020 TEL042-989-2111							
発行年月日	2020年2月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
しゅくとう 宿東遺跡	さいたまけんひだかし 埼玉県日高市 おおあさたかはぎ 大字高萩 あざしゅくとう 字宿東	242	135	35度 53分 20秒	139度 22分 58秒	2016.07.01 ~ 2016.10.06	2,590.78	駐車場造成
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
しゅくとう 宿東遺跡 (33次調査)	集落跡	縄文時代 中期中葉		住居址3軒 集石土壙1基		縄文中期中葉土器 土製品 石器		遺跡の北西端で勝坂 Ⅱ～Ⅲ期の住居址を 検出した。

日高市埋蔵文化財調査報告書 第41集

宿 東
-33次調査-

発行日	令和2年2月29日
編集兼 発行者	日高市遺跡調査会
印刷所	株式会社文化新聞社
発行所	日高市遺跡調査会 埼玉県日高市大字南平沢1020
